

## 千石荘の昆虫（2018-2021 年度調査）

岩崎 拓（CB 大阪）

### はじめに

貝塚市の中央部において里山里地の景観が残されている千石荘（現、せんごくの杜）は、草原は少ないものの、水田、畑地、ため池、二次林、竹林等から成り、ボランティアの方々によって、周回路の草刈り、灌木や竹林の手入れが行われている。

これまでの貝塚市立自然遊学館の記録では、大阪府レッドリスト種（大阪府、2014）として、アンペライ *Machaerina rubiginosa* やタヌキマメ *Crotalaria sessiliflora* などの植物、ナニワトンボ *Sympetrum gracile* やベニイトトンボ *Ceragrion nipponicum* といった昆虫のほかにも、カヤネズミ *Micromys minutus*、ノスリ *Buteo japonicus*、オオタカ *Accipiter gentilis*、フクロウ *Strix uralensis* などが確認されていて、貝塚市全体の自然にとって重要な場所となっている。

千石荘では、2011 年から定期的な昆虫調査を行っていて（岩崎、2020b など）、本報文では 2018 年から 2021 年にかけての 4 年分の結果を報告する。この 4 年間は、2020 年からの新型コロナウイルスの流行のほか、千石荘病院跡地の更地化工事、外周路の貫通、牛神池の水位低下、2018 年の台風 21 号の通過による樹木の倒伏、ナラ枯れの顕在化、カエンタケ *Trichoderma cornu-damae* の発生など、自然にとっても人間にとっても大変な時期であった。

### 調査方法

貝塚市名越、橋本、および熊取町七山北にまたがる全長約 1.8km の周回コースを設定し、2018 年から 2021 年にかけての 4 月から 12 月までに 1 回のペースで、各年合計 9 回、雨の日を避けて調査を行った。本調査地は、メッシュコード（環境庁、1997）が 51354299、標高は約 45～65mの間にある。

調査ルートは、千石荘ロータリー付近のケヤキ広場から切通しを抜け、耕作地の中を大井谷池西岸に沿って南下し、ポタン池の土手を経て二次林に入り、牛神池を 1 周し、周回路を回ってスタート地点へ戻るコースを設定した（図 1）。

調査コースの景観を図 2～10 に示した。この調査コースを約 2 時間かけて歩き、主に見取り法を用い、鳴き声で判断できる場合は記録に加えた。

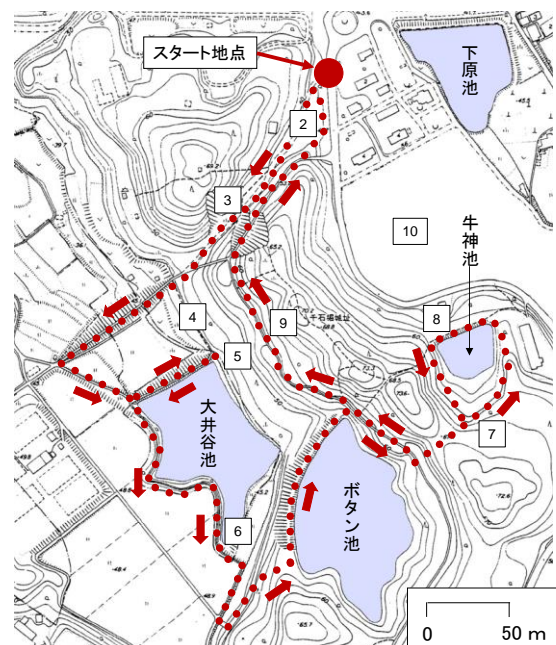


図 1. 千石荘における昆虫調査ルート

点線が歩行ルート（全長約1.9km）、矢印が進行方向を示す。  
□で囲んだ番号は、図2～図10の撮影場所を示す。



図 2. ケヤキ広場



図 3. 切通し



図 4. 外周路



図 5. ナラ枯れが目立つ林縁



図 6. 大井谷池と水田



図 7. 大樹の森



図 8. 牛神池



図 9. 周回路



図 10. 千石荘病院跡地

## 結果および考察

2018年から2021年までの4年間の調査結果を、目ごとにまとめた。また、自然遊学館職員と市民調査員との協働調査である「千石荘講座」で得られた結果（貝塚市立自然遊学館、2020a など）や、調査日以外に確認した報告済みの記録も併記した。本報文の最後に、付図として、各調査日の速報を画像付きで掲載しているので、それらもご覧いただきたい。

### 1. トンボ目

大阪府レッドリスト種に関して、2018年から2021年の4年すべてで確認されたのは、準絶滅危惧に指定されているキイトンボ、ウチワヤンマ、アキアカネの3種であった（表1：2018年、表2：2019年、表3：2020年、表4：2021年のトンボ目リスト、表18参照）。

キイトンボは、4月から12月までの月1回の調査を開始した2011年から毎年確認されていて、1回の調査で5個体以上確認されることも稀ではない状態が続いている。ウチワヤンマは2016年以降、毎年確認されるようになった。アキアカネは2014年以降確認されていなかったが、この4年

間は毎年 11 月に確認されている。貝塚市内の他の調査地でも、1 回の調査でアキアカネを複数個体見ることはほとんどなかったが、2019 年 11 月の調査では 8 個体が確認され、2020 年 11 月の調査では 9 個体が確認された。

表1. 2018年4月から12月にかけて千石荘において確認されたトンボ目

「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日	4月 10日	5月 22日	6月 4日	7月 2日	8月 2日	9月 6日	10月 2日	11月 1日	12月 4日
カワトンボ科	ハグロトンボ	<i>Atrocalopteryx atrata</i>					○	○				
アオイトトンボ科	アオイトトンボ	<i>Lestes sponsa</i>									○	
	オオアオイトトンボ	<i>Lestes temporalis</i>									○	
イトトンボ科	キイトトンボ	<i>Ceriagrion melanurum</i>					○	○	○			
	アオモンイトトンボ	<i>Ischnura senegalensis</i>						○	○	○		
	クロイトトンボ	<i>Paracercion calamarum calamarum</i>				○						
サナエトンボ科	ウチワヤンマ	<i>Sinictinogomphus clavatus clavatus</i>				○						
	タイワンウチワヤンマ	<i>Ictinogomphus pertinax</i>								○		
ヤンマ科	ギンヤンマ	<i>Anax parthenope julius</i>		○	○	○	○	○	○	○		
エトトンボ科	オオヤマトンボ	<i>Epopthalmia elegans elegans</i>			○							
トンボ科	ヨツボシトンボ	<i>Libellula quadrimaculata asahinai</i>			○							
	シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>			○	○	○	○	○			
	オオシオカラトンボ	<i>Orthetrum melania melania</i>					○	○	○	○		
	ショウジョウトンボ	<i>Crocothemis servilla mariannae</i>			○			○		○		
	リスアカネ	<i>Sympetrum risi risi</i>							○			
	アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i>									○	
	チョウトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i>				○		○				
	コシアキトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i>			○	○	○					
	ウスバキトンボ	<i>Pantala flavescens</i>						○		○		

表2. 2019年4月から12月にかけて千石荘において確認されたトンボ目

「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日	4月 9日	5月 2日	6月 13日	7月 25日	8月 6日	9月 10日	10月 8日	11月 5日	12月 3日
カワトンボ科	ハグロトンボ	<i>Atrocalopteryx atrata</i>					○	○				
アオイトトンボ科	アオイトトンボ	<i>Lestes sponsa</i>								○		
	オオアオイトトンボ	<i>Lestes temporalis</i>								○	○	
イトトンボ科	キイトトンボ	<i>Ceriagrion melanurum</i>				○	○	○	○			
	アオモンイトトンボ	<i>Ischnura senegalensis</i>								○		
サナエトンボ科	ウチワヤンマ	<i>Sinictinogomphus clavatus clavatus</i>				○	○	○				
	タイワンウチワヤンマ	<i>Ictinogomphus pertinax</i>					○	○				
ヤンマ科	ギンヤンマ	<i>Anax parthenope julius</i>			○	○	○	○				
エトトンボ科	オオヤマトンボ	<i>Epopthalmia elegans elegans</i>					○					
トンボ科	シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>			○	○	○	○	○			
	オオシオカラトンボ	<i>Orthetrum melania melania</i>				○	○	○	○			
	ショウジョウトンボ	<i>Crocothemis servilla mariannae</i>				○		○				
	リスアカネ	<i>Sympetrum risi risi</i>					○	○	○			
	アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i>									○	
	チョウトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i>				○	○	○	○			
	コシアキトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i>				○	○	○	○			
	ウスバキトンボ	<i>Pantala flavescens</i>					○	○	○			

表3. 2020年4月から12月にかけて千石荘において確認されたトンボ目

「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日	4月 9日	5月 6日	6月 9日	7月 2日	8月 4日	9月 8日	10月 1日	11月 4日	12月 3日
カワトンボ科	ハグロトンボ	<i>Atrocalopteryx atrata</i>							○			
イトトンボ科	キイトトンボ	<i>Ceriagrion melanurum</i>				○	○	○				
サナエトンボ科	ウチワヤンマ	<i>Sinictinogomphus clavatus clavatus</i>					○	○	○	○		
ヤンマ科	ギンヤンマ	<i>Anax parthenope julius</i>						○	○	○		
	サラサヤンマ	<i>Sarasaeschna pryeri</i>				○						
トンボ科	シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>			○	○	○	○	○	○		
	オオシオカラトンボ	<i>Orthetrum melania melania</i>					○	○		○		
	シオヤトンボ	<i>Orthetrum japonicum</i>				○						
	ショウジョウトンボ	<i>Crocothemis servilla mariannae</i>				○	○	○				
	ネキトンボ	<i>Sympetrum speciosum</i>									○	
	リスアカネ	<i>Sympetrum risi risi</i>								○	○	
	アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i>									○	
	チョウトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i>						○				
	コシアキトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i>				○	○	○				
ウスバキトンボ	<i>Pantala flavescens</i>					○	○	○	○			



表4. 2021年4月から12月にかけて千石荘において確認されたトンボ目

「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日											
			4月 6日	5月 6日	6月 3日	7月 6日	8月 6日	9月 13日	10月 14日	11月 2日	12月 5日			
カワトンボ科	ハグロトンボ	<i>Atrocalopteryx atrata</i>				○								
アオイトトンボ科	アオイトトンボ	<i>Lestes sponsa</i>										○		
イトトンボ科	キイトトンボ	<i>Ceragrion melanurum</i>			○	○	○	○						
サナエトンボ科	ウチワヤンマ	<i>Sinictinogomphus clavatus clavatus</i>				○	○							
	タイワンウチワヤンマ	<i>Ictinogomphus pertinax</i>				○								
ヤンマ科	ギンヤンマ	<i>Anax parthenope julius</i>		○		○	○			○				
	クロスジギンヤンマ	<i>Anax nigrofasciatus nigrofasciatus</i>		○	○									
	サラサヤンマ	<i>Sarasaeschna pryeri</i>			○									
トンボ科	シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>		○	○	○	○	○						
	オオシオカラトンボ	<i>Orthetrum melania melania</i>						○	○	○				
	リスアカネ	<i>Sympetrum risi risi</i>							○	○				
	アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i>										○		
	マユタテアカネ	<i>Sympetrum eroticum eroticum</i>									○			
	チョウトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i>					○	○						
	コシアキトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i>			○	○	○							
	ウスバキトンボ	<i>Pantala flavescens</i>						○	○					

その他、大阪府レッドリスト種として、サラサヤンマが2020年と2021年に（図11）、ヨツボシトンボが2018年に確認されている。以前に確認されていて、この4年間で確認されなかった種としては、ナニワトンボ、ベニイトトンボ、ノシメトンボ *Sympetrum infuscatum* があげられ、それぞれ、2014年、2016年、2012年が最後の確認年となっている。



図11. サラサヤンマ  
(2020年6月9日)

調査日以外の記録で書き留めておくべき種は、2019年8月9日の「千石荘講座」で確認された絶滅危惧Ⅱ類のネアカヨシヤンマ *Aeschnophlebia anisoptera*（貝塚市立自然遊学館、2021）と、2019年10月15日の台風19号通過後に確認された絶滅危惧Ⅰ類のオオキトンボ *Sympetrum uniforme*（岩崎、2020a）、および藤村雅志氏が2020年6月9日に採集し、自然遊学館に寄贈された絶滅危惧Ⅱ類のエゾトンボ *Somatochlora viridiaenea* の羽化殻（貝塚市立自然遊学館、2020b）である。

## 2. バッタ目

大阪府レッドリスト種は、ナツノツヅレサセコオロギだけで、この4年間も含めて2014年以降、毎年確認され（表5：2018年、表6：2019年、表7：2020年、表8：2021年のバッタ目リスト）、個体数は増加傾向にある。

ウスグモスズは、2011年に確認された後、しばらく未確認だったが、2017年からは2019年まで再び3年連続で確認された（図12）。



図12. ウスグモスズ  
(2018年10月2日)

やや不安になる結果は、草原の普通種であるホシササキリが、2019年と2020年の2年間で1個体しか確認されなかったことである。千石荘周辺の草原（林縁でもなく、水田の畦でもない）の少なさから、個体群が不安定化しているのかもしれない。

表5. 2018年4月から12月にかけて千石荘において確認されたバッタ目

「△」印は幼虫、「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日											
			4月 10日	5月 22日	6月 4日	7月 2日	8月 2日	9月 6日	10月 2日	11月 1日	12月 4日			
コロギス科	ハネナシコロギス	<i>Nippancistroger testaceus</i>			○									
キリギリス科	クビキリギリス	<i>Euconocephalus thunbergi</i>		○	○									
	クサキリ	<i>Ruspolia lineosa</i>				△								
	オナガササキリ	<i>Conocephalus gladius</i>					△		○	○	○			
	ホシササキリ	<i>Conocephalus maculatus</i>			△	○		○	○	○		△		
	ウスイロササキリ	<i>Conocephalus chinensis</i>				○		△	○	○				
	キリギリス	<i>Gampsocleis buergeri</i>			△	○	○	○						
	ヤブキリ	<i>Tettigonia orientalis</i>	△	△	△	○								
ツユムシ科	セスジツユムシ	<i>Ducetia japonica</i>									○			
コオロギ科	ナツノツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus grylloides</i>				○								
	ツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus micado</i>					△		○					
	モリオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus sylvestris</i>						○	○					
	ハラオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus campestris</i>						○	○	○	○	○		
	エンマコオロギ	<i>Teleogryllus emma</i>				△		○	○	○				
	マツムシ科	アオマツムシ	<i>Trujalia hibernis</i>						△○	○				
	マツムシ	<i>Xenogryllus marmoratus</i>							○					
ヒバリモドキ科	ヒロバネカントン	<i>Oecanthus euryelytra</i>								○				
	クサヒバリ	<i>Sivistella bifasciata</i>							○	○	○			
	キンヒバリ	<i>Natula matsuurai</i>		○	○	○		○						
	カヤヒバリ	<i>Natula pallidula</i>			○	○								
	マダラスズ	<i>Dianemobius nigrofascatus</i>				○		○	○	○	○	○		
	シバズ	<i>Polionemobius mikado</i>				○				○	○			
	ウスグモスズ	<i>Amusurgus genji</i>						○	○					
カネタタキ科	カネタタキ	<i>Ornebius kanetataki</i>						△○	○	○	○			
オンブバッタ科	アカハネオンブバッタ	<i>Atractomorpha sinensis sinensis</i>				○		○	○	○				
	オンブバッタ	<i>Atractomorpha lata</i>										○		
ヒシバッタ科	ヒシバッタ属	<i>Tetrix</i> sp.	△											
バッタ科	ツチイナゴ	<i>Patanga japonica</i>	○	○	○				△○	△○	○	○		
	コバネイナゴ	<i>Oxya yezoensis</i>		△			○	○	○	○	○	○		
	ショウリヨウバッタ	<i>Acrida cinerea</i>				△	○	○	○	○				
	ショウリヨウバッタモドキ	<i>Gonista bicolor</i>						○	○	○				
	トノサマバッタ	<i>Locusta migratoria</i>		△○		○	△							
	クルマバッタモドキ	<i>Oedaleus infernalis</i>						○						
	イボバッタ	<i>Trilophidia japonica</i>					○	○						

表6. 2019年4月から12月にかけて千石荘において確認されたバッタ目

「△」印は幼虫、「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日											
			4月 9日	5月 2日	6月 13日	7月 25日	8月 6日	9月 10日	10月 8日	11月 5日	12月 3日			
キリギリス科	ササキリ	<i>Conocephalus melaenus</i>				△								
	オナガササキリ	<i>Conocephalus gladius</i>							○	○	○			
	ウスイロササキリ	<i>Conocephalus chinensis</i>					○		○					
	キリギリス	<i>Gampsocleis buergeri</i>		△	△	○	○	○						
	ヤブキリ	<i>Tettigonia orientalis</i>	△	△	○									
コオロギ科	ナツノツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus grylloides</i>			○	○								
	ツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus micado</i>									○	○		
	モリオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus sylvestris</i>							○		○			
	ハラオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus campestris</i>							○	○	○	○		
	エンマコオロギ	<i>Teleogryllus emma</i>					○	○	○	○				
	マツムシ科	アオマツムシ	<i>Trujalia hibernis</i>					△	○	○				
	マツムシ	<i>Xenogryllus marmoratus</i>							○					
ヒバリモドキ科	カントン	<i>Oecanthus longicauda</i>								○	○			
	クサヒバリ	<i>Sivistella bifasciata</i>							○	○	○			
	キンヒバリ	<i>Natula matsuurai</i>		○	○					○				
	カヤヒバリ	<i>Natula pallidula</i>			○									
	マダラスズ	<i>Dianemobius nigrofascatus</i>							○	○	○	○		
	シバズ	<i>Polionemobius mikado</i>									○			
	ウスグモスズ	<i>Amusurgus genji</i>						○						
カネタタキ科	カネタタキ	<i>Ornebius kanetataki</i>						○	○	○	○			
オンブバッタ科	アカハネオンブバッタ	<i>Atractomorpha sinensis sinensis</i>			△○			○	○	○				
	オンブバッタ	<i>Atractomorpha lata</i>						○	○					
ヒシバッタ科	ハラヒシバッタ	<i>Tetrix japonica</i>					○			○				
	ヒシバッタ属	<i>Tetrix</i> sp.	△	○							△			
バッタ科	ツチイナゴ	<i>Patanga japonica</i>			○	△		△	○	○	○			
	コバネイナゴ	<i>Oxya yezoensis</i>				△	○	○	○	○				
	ショウリヨウバッタ	<i>Acrida cinerea</i>				△○	○	○						
	ショウリヨウバッタモドキ	<i>Gonista bicolor</i>									○			
	トノサマバッタ	<i>Locusta migratoria</i>			○	○		○						
	クルマバッタモドキ	<i>Oedaleus infernalis</i>				△	○							
	イボバッタ	<i>Trilophidia japonica</i>						○						

表7. 2020年4月から12月にかけて千石荘において確認されたバッタ目

「△」印は幼虫、「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
				9日	6日	9日	2日	4日	8日	1日	4日	3日
キリギリス科	クビキリギス	<i>Euconocephalus thunbergi</i>		○								
	クサキリ	<i>Ruspolia lineosa</i>					△					
	ササキリ	<i>Conocephalus melaenus</i>								○		
	オナガササキリ	<i>Conocephalus gladiatus</i>							○	○	○	
	ホシササキリ	<i>Conocephalus maculatus</i>								○		
	ウスイロササキリ	<i>Conocephalus chinensis</i>							○	○	○	
	キリギリス	<i>Gampsocleis buergeri</i>		△		△	○	○	○			
	ヤブキリ	<i>Tettigonia orientalis</i>		△	△	△	○					
コオロギ科	ナツノツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus grylloides</i>					○					
	ツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus micado</i>							○			
	モリオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus sylvestris</i>							○	○	○	
	ハラオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus campestris</i>							○	○		
	エンマコオロギ	<i>Teleogryllus emma</i>							○	○	○	
マツムシ科	アオマツムシ	<i>Trujalia hibernis</i>							○	○		
	カンタン	<i>Oecanthus longicauda</i>								○		
	カンタン属	<i>Oecanthus sp.</i>					○					
ヒバリモドキ科	クサヒバリ	<i>Svistella bifasciata</i>							○	○	○	
	キンヒバリ	<i>Natula matsuurai</i>		○	○	○	○					
	カヤヒバリ	<i>Natula pallidula</i>			○	○						
	マダラスズ	<i>Dianemobius nigrofuscatus</i>					○		○	○	○	○
	シバズ	<i>Polionemobius mikado</i>					○			○	○	○
カネタタキ科	カネタタキ	<i>Ornebius kanetataki</i>						○	○	○	○	
オンバッタ科	アカハネオンバッタ	<i>Atractomorpha sinensis sinensis</i>					△	○	○	○	○	○
	オンバッタ	<i>Atractomorpha lata</i>							○			
ヒシバッタ科	ヒシバッタ属	<i>Tetrix sp.</i>									△	
バッタ科	ツチイナゴ	<i>Patanga japonica</i>				○	○		△	△○	○	
	コバネイナゴ	<i>Oxya yezoensis</i>							○	○	○	
	ショウリョウバッタ	<i>Acrida cinerea</i>					△	△○	○	○		
	ショウリョウバッタモドキ	<i>Gonista bicolor</i>						△		○	○	
	トノサマバッタ	<i>Locusta migratoria</i>				△			○			
	クルマバッタモドキ	<i>Oedaleus infemalis</i>							○			
	マダラバッタ	<i>Aiolopus thalassinus tamulus</i>							○			
	イボバッタ	<i>Trilophidia japonica</i>							○			

表8. 2021年4月から12月にかけて千石荘において確認されたバッタ目

「△」印は幼虫、「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
				6日	6日	3日	6日	6日	13日	14日	2日	5日
キリギリス科	クサキリ	<i>Ruspolia lineosa</i>					△					
	ササキリ	<i>Conocephalus melaenus</i>						△		○		
	オナガササキリ	<i>Conocephalus gladiatus</i>							○	○	○	
	ホシササキリ	<i>Conocephalus maculatus</i>				△	○		△○	○	○	
	ウスイロササキリ	<i>Conocephalus chinensis</i>							○	○	○	
	キリギリス	<i>Gampsocleis buergeri</i>				△	○	○	○			
	ヤブキリ	<i>Tettigonia orientalis</i>		△	△	△						
ツユムシ科	ツユムシ	<i>Phaneroptera falcata</i>							○			
	セスツユムシ	<i>Ducetia japonica</i>								○		
コオロギ科	ナツノツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus grylloides</i>					○					
	ツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus micado</i>							○	○		
	モリオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus sylvestris</i>							○	○	○	
	ハラオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus campestris</i>							○	○	○	
	タンボコオロギ	<i>Modicogryllus siamensis</i>										
	エンマコオロギ	<i>Teleogryllus emma</i>				○						
マツムシ科	アオマツムシ	<i>Trujalia hibernis</i>							○	○	○	
ヒバリモドキ科	クサヒバリ	<i>Svistella bifasciata</i>							○	○	○	
	キンヒバリ	<i>Natula matsuurai</i>				○	○					
	カヤヒバリ	<i>Natula pallidula</i>				○						
	マダラスズ	<i>Dianemobius nigrofuscatus</i>					○		○	○	○	○
	シバズ	<i>Polionemobius mikado</i>					○			○	○	
カネタタキ科	カネタタキ	<i>Ornebius kanetataki</i>						○	○	○		
オンバッタ科	アカハネオンバッタ	<i>Atractomorpha sinensis sinensis</i>					○		○	○		
ヒシバッタ科	ハラヒシバッタ	<i>Tetrix japonica</i>					○					
バッタ科	ツチイナゴ	<i>Patanga japonica</i>			○	○	△	△	△○	○	○	
	コバネイナゴ	<i>Oxya yezoensis</i>				△	△	△○	○	○	○	
	ショウリョウバッタ	<i>Acrida cinerea</i>					△○	○	○	○	○	
	ショウリョウバッタモドキ	<i>Gonista bicolor</i>							○		○	
	トノサマバッタ	<i>Locusta migratoria</i>					○	△				
	クルマバッタモドキ	<i>Oedaleus infemalis</i>						○	○			
	マダラバッタ	<i>Aiolopus thalassinus tamulus</i>					○					
	イボバッタ	<i>Trilophidia japonica</i>							○	○		

千石荘のカンタン類は、外見と鳴き声から、カンタンの西日本低地型とヒロバネカンタンの2種を記録してきた。しかしながら、2020年7月に聞いたカンタンに似た連続的な鳴き声は、時期から判断して種まで同定できないものであった。

外来種のアカハネオンブバッタは、貝塚市内では2013年に近木川河口で初めて確認され、千石荘では、2016年の「千石荘講座」で初めて確認された。今回の調査でも毎年確認され、(オンブバッタ/アカハネオンブバッタ)の成虫の確認数は、2018年から4年間で、(1個体/8個体)、(2個体/6個体)、(2個体/13個体)、(0個体/16個体)と推移し、在来種のオンブバッタの確認が困難になってきている。

明るく開けた草原の指標種として注目してきたショウリョウバッタモドキとクルマバッタ *Gastrimargus marmoratus* は対照的な消長となり、ショウリョウバッタモドキはほぼ毎年確認されているのに対して、クルマバッタは、2015年の「千石荘講座」での確認が最後となっている(貝塚市立自然遊学館、2017)。

### 3. カマキリ目

オオカマキリ、チョウセンカマキリ、ハラビロカマキリの3種が、4年を通して確認され、オオカマキリの個体数が4年とも最多であった(表9)。コカマキリとサツマヒメカマキリは、おそらく密度が低く、月1回の調査では、確認できない年が出るのかもしれない。この議論は、以下の多くの種に当てはまるものである。これらの個体のうち摂食中のものは、2018年12月のオオカマキリのメス成虫だけであり、コカマキリのメス成虫を捕食していた。交尾中の個体は、2020年10月のオオカマキリの1ペアのみであった(図13)。ヒメカマキリ *Acromantis japonica* は2014年が最後の確認年になっている。



図13. オオカマキリ交尾ペア  
(2020年10月1日)

表9. 2018年から2021年にかけて千石荘で確認されたカマキリ目

「△」印は幼虫、「○」印は成虫、それぞれの印の右側の数値は、4月から12月にかけて確認された合計個体数を示す。

科	種	学名	2018年	2019年	2020年	2021年	4年間の合計
カマキリ科	オオカマキリ	<i>Tenodera aridifolia</i>	△10 ○3	△7 ○1	△8 ○3	△7 ○3	42個体
	チョウセンカマキリ	<i>Tenodera angustipennis</i>	△3	△3	○2	○1	9個体
	ハラビロカマキリ	<i>Hierodula patellifera</i>	△2 ○3	△1 ○1	△1 ○1	△1 ○1	11個体
	コカマキリ	<i>Statilia maculata</i>	○2				2個体
ヒメカマキリ科	サツマヒメカマキリ	<i>Acromantis satsumensis</i>			△2 ○1	3個体	

カマキリの寄生者であるカマキリヤドリバエ *Exorista bisetosa* の卵を付着させられたカマキリ個体は、2017年まではほぼ毎年確認されていたが、この4年間は確認されなかった。卵嚢寄生者であるカマキリタマゴカツオブシムシ *Thaumaglossa rufocapillata* は、2019年10月にハラビロカマキリの卵嚢上に1個体、および2021年6月にアカメガシワ *Mallotus japonicus* の葉の蜜腺に止まっている1個体を確認した。

#### 4. カメムシ目

セミ科では、ニイニイゼミ *Platypleura kaempferi*、アブラゼミ *Graptopsaltria nigrofuscata*、クマゼミ *Cryptotympana facialis*、ツクツクボウシ *Meimuna opalifera* の4種の鳴き声を、この4年とも聞き、その他、ミンミンゼミ *Hyalessa maculaticollis* の鳴き声を2019年の9月に1個体だけ聞いた。ミンミンゼミの鳴き声を聞いたのは、2016年の「千石荘講座」以来であり（貝塚市立自然遊学館、2018）、それ以前の記録は2011年まで遡る。チッチゼミ *Kosemia radiator* は、この4年間で確認できず、2015年が最後の確認年になっている。

2011年以降の調査で初めて確認されたものは、アヤヘリハネナガウンカ *Losbanosia hibarensis*（2018年7月）、ヒモワタカイガラムシ *Takahasia japonica*（2020年5月）、チュウゴクアミガサハゴロモ *Pochazia shantungensis*（2021年9月以降の4回の調査、図14）である。

チュウゴクアミガサハゴロモは、確認当時、正体が分からず、「アミガサハゴロモ近似種」として扱っていたものである。「千石荘講座」においても、当地での最初の確認年は2021年である。和名は、2023年に自然遊学館の職員の方に教えていただいた。

アメンボ科に関しては、表10に普通種としてあげたアメンボが調査範囲内のほとんどの池で見られたほか、オオアメンボ *Aquarius elongates*（2018年6月）、コセアアメンボ *Gerris gracilicornis*（2019年4月、5月、2020年4月、7月）、ヒメアメンボ *Gerris latiabdominis*（2020年5月）が、それぞれ個別の池で確認されている。

千石荘では水田や各種の野菜が栽培されている耕作地があるにも関わらず、カメムシ科の種数と個体数は少なく、特にイネ科を加害するものとしては、シラホシカメムシ *Eysarcoris ventralis*（2018年9月）とミナミアオカメムシ *Nezara viridula*（2021年11月、幼虫と成虫）の確認に留まる。

表10に、千石荘におけるカメムシ目の普通種の確認年を示した。池やビオトープの水面に浮かぶアメンボ、耕作地の畦の草間に生息するセジロウンカ、ヒメトビウンカ、トビイロウンカ、オオヨコバイ、シロミヤクイチモンジヨコバイ、アカスジカスミカメ、ウスモンミドリカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソヘリカメムシ、林縁の草地におけるシロオビアワフキ、セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ、アワダチソウグンバイ、マルカメムシ、ヒメジュウジナガカメムシ（図15）、ホソヘリカメムシ、ホシハラビロヘリカメムシ、ホオズキカメムシ、林縁のツマグロオオヨコバイ、アオバハゴロモ、ベニキジラミ、ハゼアブラムシ、エノキワタアブラムシ、林床のオオモン



図14. チュウゴクアミガサハゴロモ  
(2021年9月13日)  
シナアブラギリ *Aleurites fordii*



図15. ヒメジュウジナガカメムシ幼虫  
(2021年9月13日)  
ガガイモ *Metaplexis japonica*



シロナガカメムシ、および樹幹のヨコヅナサシガメなどがあげられる（表 10）。これらの普通種でも、先に述べたように、月 1 回の調査では未確認となる年がある。

表10. 2018年から2021年にかけて千石荘で確認されたカメムシ目の普通種

4年間の調査のうち、3年以上で確認された種を掲載した。（セミ科を除く）  
「△」印は幼虫、「○」印は成虫、「ゴール」は虫えいでの確認を示す。

科	種	学名	2018年	2019年	2020年	2021年
アワフキムシ科	シロオビアワフキ	<i>Aphrophora intermedia</i>		○	○	○
ヨコバイ科	オオヨコバイ	<i>Cicadella viridis</i>	○	○		○
	ツマグロオオヨコバイ	<i>Bothrogonia ferruginea</i>	○	○	○	○
	シロミヤウイチモンジヨコバイ	<i>Paramesodes albinervosus</i>	○	○	○	○
ウンカ科	ヒメトビウンカ	<i>Laodelphax striatellus</i>	○	○	○	
	セジロウンカ	<i>Sogatella furcifera</i>	○		○	○
	トビイロウンカ	<i>Nilaparvata lugens</i>	○	○	○	○
アオバハゴロモ科	アオバハゴロモ	<i>Geisha distinctissima</i>	○	○	○	○
キジラミ科	ベニキジラミ	<i>Psylla coccinea</i>		○ゴール	ゴール	ゴール
アブラムシ科	ハゼアブラムシ	<i>Toxoptera odinae</i>	○	○	○	○
	エノキワタアブラムシ	<i>Shivaphis celti</i>	○	○	○	
	セイ幼アワダチウヘゲガアブラムシ	<i>Uroleucon nigrotuberculatum</i>	○	○	○	○
アメンボ科	アメンボ	<i>Aquarius paludum paludum</i>	○	○	○	○
サシガメ科	ヨコヅナサシガメ	<i>Agriosphodrus dohmi</i>	△○	△○	△	△
カスミカメシ科	アカスジカスミカメ	<i>Stenotus rubrovittatus</i>	○	○	○	○
	ウスモンミドリカスミカメ	<i>Taylorilygus apicalis</i>	○	○	○	○
ゲンバウムシ科	アワダチソウゲンバイ	<i>Corythucha marmorata</i>	○	○	○	○
マルカメムシ科	マルカメムシ	<i>Megacopta punctatissimum</i>	△○	○	○	○
イトカメムシ科	イトカメムシ	<i>Yemma exilis</i>	○	○	○	○
ナガカメムシ科	オオモンシロナガカメムシ	<i>Metochus abbreviatus</i>	○		○	○
	ヒメジュウジナガカメムシ	<i>Tropidothorax sinensis</i>	○		△○	△○
ホソヘリカメムシ科	クモヘリカメムシ	<i>Leptocoris chinensis</i>	○	○	○	○
	ホソヘリカメムシ	<i>Riptortus pedestris</i>		○	○	○
ヘリカメムシ科	ホシハラビロヘリカメムシ	<i>Homoeocerus unipunctatus</i>	△○	○	○	△○
	ホソハリカメムシ	<i>Cletus punctiger</i>	○	○	○	○
	ホオズキカメムシ	<i>Acanthocoris sordidus</i>	○		○	○

ヤノクチナガオオアブラムシ *Stomaphis yanonis* も 2019 年から 2021 年の 3 年にかけて確認されている。ただし、ナナメノキ *Ilex chinensis* やエノキ *Celtis sinensis* の樹幹の表面につくられたトビイロケアリ *Lasius japonicus* の蟻道内という特殊かつ限られた場所に生息するので、普通種としては扱わなかった。反対に、当地で 2015 年に初めて確認されたクスベニヒラタカスミカメ *Mansoniella cinnamomi* は、この 4 年では 2019 年 7 月しか確認できなかったが、これはクスノキ *Cinnamomum camphora* のほとんどが大木になり（上久保ほか、2020）、葉が高所にあるからである。葉には遠目にも吸汁痕が多数見られ、普通種となっている可能性がきわめて高い。

## 5. コウチュウ目

2020 年 10 月 9 日の「千石荘講座」において澤田義弘氏がカシノナガキクイムシ *Platypus quercivorus* を採集した。2018 年以前から、コナラ *Quercus serra* やクヌギ *Quercus acutissima* の樹幹から、黒ずんだ色の従来とは異なる臭いの樹液が滲み出していて、この 4 年間で一気にナラ枯れが目立つようになった（図 5）。そのような「変な」樹液にもクワガタムシは集まり、コクワガタ *Dorcus rectus* は、2018 年 6 月、2020 年 6 月、9 月、2021 年 7 月に、ヒラタクワガタ *Dorcus titanus* は 2021 年 7 月に確認されている。カナブン *Rhomborrhina japonica* やシロテンハナムグリ *Protaetia orientali* のほか、ヨツボシケシキスイ *Glischrochilus japonius*、キマダラケシキス

イ *Soronia japonica*、ナガゴゲチャケシキスイ *Amphicrossus lewisi*、ルイスコオニケシキスイ *Cryptarcha lewisi*、ヨツボシオオキスイ *Helota gemmata* なども樹液まわりの常連である。また、伐採・切断されたコナラやクヌギの樹幹の下には、4年間を通して、カブトムシ *Trypoxylus dichotomus* の幼虫が確認されている。その他、馴染みのあるコウチュウとしては、タマムシ *Chrysochroa fulgidissima* が2018年8月と2021年8月に確認されている。

外来種の本ネアカオオクロテントウ *Synona consanguinea* は、貝塚市に隣接する岸和田市や熊取町では2017年以前から記録があったが、今回、2018年4月にヤマザクラ *Cerasus jamasakura* の葉上で1個体を確認した。その後も、本調査ではないが、「千石荘講座」において、2019年と2020年に確認されている。

カミキリムシ科に関しては、2019年5月に確認されたヤツボシハナカミキリ *Leptura mimica* が、自然遊学館に標本がない種であった(図16)。その他、確認個体数が少ないので、全データを確認日順に紹介する：ナガゴマフカミキリ *Mesosa longipennis* (2018年8月)、キクスイカミキリ *Phytoecia rufiventris* (2019年5月)、ヨツスジトラカミキリ *Chlorophorus quinquefasciatus* (2019年8月、2020年8月)、キマダラカミキリ *Aeolesthes chrysothrix* (2019年8月、2021年5月)、ヤツメカミキリ *Eutetrappa ocelota* (2020年5月、2021年5月)、キボシカミキリ *Psacothea hilaris* (2021年6月)、ミヤマカミキリ *Massicus raddei* (2021年8月)、以上の8種に留まる。ナラ枯れ対策のために伐採されたコナラやクヌギの樹幹が放置される状況が続けば、カミキリムシ科の確認がこれから増える可能性がある。

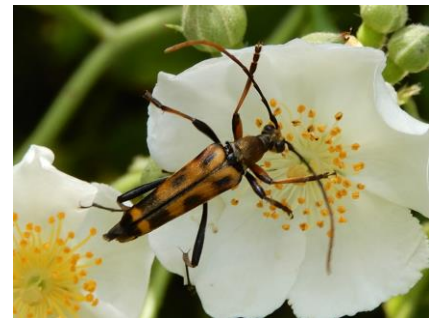


図16. ヤツボシハナカミキリ  
(2019年5月2日)  
ノイバラ *Rosa multiflora*

ハムシ科では、外来種でサツマイモ *Ipomoea batatas* を含むヒルガオ科を摂食するヨツモンカメノコハムシ *Lacoptera quadrimaculata* の侵入という事件があった。大阪府下ではこれまで大阪市の南港でしか確認されていなかったが、河添純子氏によって貝塚市内で2020年5月に確認され(河添、2020)、その後、自然遊学館の調査によって、貝塚市内および泉州地方で広く分布していることが判明した。千石荘では同年6月2日に確認されたのが最初の記録となり、本調査でも同年6月9日以降、ヒルガオ *Calystegia pubescens* やリュウキュウアサガオ *Ipomoea indica* 上で継続して確認されている(図17)。



図17. ヨツモンカメノコハムシ  
の食害を受けたヒルガオ  
(2020年6月9日)

別のハムシ科外来種であるブタクサハムシ *Ophraella communa* は、2020年8月に確認され、2021年は7月以降継続して確認されている。外周路の整備・貫通に伴ってオオブタクサ *Ambrosia trifida* が繁茂し、それを食草とするブタクサハムシも大発生といってよい状態になっている。

6. ハエ目

キアシキンシギアブは、2016年から2019年にかけて確認できなかったが、2020年5月と2021年5月に確認された(図18、表18参照)。ハチモドキハナアブは、この4年間確認されず、2013年が最後の確認年になっている。表11には、属まで同定できたものを示した。

ハエ目に関しては、同定できなかったものが大半である。特に、ユスリカ科、ショウジョウバエ科およびその近縁の科、クロバエ科、ニクバエ科は、ほとんど同定できていない。



図18. キアシキンシギアブ  
(2021年5月6日)

表11. 2018年から2021年にかけて千石荘で確認されたハエ目

属まで同定できたものを掲載した。  
「○」印は成虫、「ゴール」は虫えいでの確認を示す。

科	種	学名	2018年	2019年	2020年	2021年
ガガンボ科	キリウジガガンボ	<i>Tipula aino</i>	○	○	○	
	キイロホソガガンボ	<i>Nephrotoma virgata</i>	○	○		○
	ミスジガガンボ	<i>Gymnastes flavitibia</i>	○			
タマバエ科	ヨモギワタタマバエ	<i>Rhaphalomyia giraldii</i>	ゴール	ゴール		ゴール
	エノキトガリタマバエ	<i>Celticecis japonica</i>	ゴール			
	クズトガリタマバエ	<i>Ptydiplosis puerariae</i>	ゴール			ゴール
	ウリウロコタマバエ	<i>Lasioptera</i> sp.		ゴール		
カ科	ヒトスジシマカ	<i>Aedes albopictus</i>	○	○	○	○
ユスリカ科	オオユスリカ	<i>Chironomus plumosus</i>	○		○	○
	アカムシユスリカ	<i>Propillocerus akamusi</i>		○		
ミズアブ科	ミズアブ	<i>Stratiomys japonica</i>		○		
	アメリカミズアブ	<i>Hermetia illucens</i>	○	○		○
	ルリミズアブ	<i>Sargus nipponensis</i>		○		
	ハラキンミズアブ	<i>Microchrysa flaviventris</i>			○	○
	Actina属	<i>Actina</i> sp.	○	○		○
シギアブ科	キアシキンシギアブ	<i>Chrysopilus ditissimis</i>			○	○
アブ科	ウシアブ	<i>Tabanus trigonus</i>	○	○	○	○
ツリアブ科	スキバツリアブ	<i>Villa limbata</i>	○	○	○	
	コウヤツリアブ	<i>Anthrax aygulus</i>		○		
	ビロウドツリアブ	<i>Bombylius major</i>		○	○	
ムシヒキアブ科	シオヤムシヒキ	<i>Promachus yesonicus</i>	○	○	○	○
	アオメムシヒキ	<i>Cophinopoda chinensis</i>		○	○	○
	マグリケムシヒキ	<i>Neoitamus angusticornis</i>				○
	ヒサマツムシヒキ	<i>Tolmerus hisamatsui</i>		○		
アシナガバエ科	マダラアシナガバエ	<i>Condyllostylus nebulosus</i>	○	○	○	○
ハナアブ科	クロヒラタアブ	<i>Betasyrphus serarius</i>		○	○	
	ホソヒラタアブ	<i>Episyrphus balteatus</i>	○	○	○	○
	ナミホシヒラタアブ	<i>Eupeodes bucculatus</i>				○
	ホソヒメヒラタアブ	<i>Sphaerophoria macrogaster</i>	○	○	○	○
	シママメヒラタアブ	<i>Paragus fasciatus</i>				○
	キゴシハナアブ	<i>Eristalinus quinquestriatus</i>				○
	シマハナアブ	<i>Eristalis cerealis</i>	○	○	○	○
	アシトハナアブ	<i>Helophilus virgatus</i>	○	○	○	○
	オオハナアブ	<i>Phytomia zonata</i>	○	○	○	○
	アリノスアブ属	<i>Microdon</i> sp.	○			
アシナガヤセバエ科	ホシアシナガヤセバエ	<i>Stypocladus appendiculatus</i>	○	○	○	○
ミバエ科	ハルササハマダラミバエ	<i>Paragastrostzonia japonica</i>	○			
	ミスジミバエ	<i>Zeugodacus scutellatus</i>				
ベッコウバエ科	ベッコウバエ	<i>Stemodyomyza formosa</i>	○	死体		
ヤチバエ科	ヒゲナガヤチバエ	<i>Sepedon aenescens</i>	○	○	○	○
フンバエ科	キアシフンバエ	<i>Scathophaga mellipes</i>		死体		
クロバエ科	ツマグロキンバエ	<i>Stomorhina obsoleta</i>	○	○	○	○
	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i>		○	○	
ヤドリバエ科	セスジハリバエ	<i>Tachina nupta</i>		○	○	○
	ヨコジマオオハリバエ	<i>Tachina jakovlevi</i>		○		

## 7. チョウ目

チョウ類は、2018年から2021年における各年の確認種数が、30種、26種、27種、29種とほぼ同数で推移した（表12：2018年、表13：2019年、表14：2020年、表15：2021年）。2011年以降、最少の種数は2014年の19種で、最多の種数は2017年と2018年の30種となっている。

表12. 2018年4月から12月にかけて千石荘において確認されたチョウ類

「△」印は幼虫、「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日	4月 10日	5月 22日	6月 4日	7月 2日	8月 2日	9月 6日	10月 2日	11月 1日	12月 4日
アゲハチョウ科	ナミアゲハ	<i>Papilio xuthus</i>		○		○		○	○			
	ナガサキアゲハ	<i>Papilio memnon</i>			○			○	○			
	クロアゲハ	<i>Papilio protenor</i>					○					
	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon</i>				○	○					
シロチョウ科	キタキチョウ	<i>Eurema mandarina</i>		○		○		○		○	○	○
	モンキチョウ	<i>Colias erate</i>		○	○				○			
	モンシロチョウ	<i>Pieris rapae</i>		○	○	○	○	○	○	○	○	○
タテハチョウ科	ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus</i>			○		○		○	○		
	ヒメジャノメ	<i>Mycalesis gotama</i>				○						
	ヒカゲチョウ	<i>Lethe sicelis</i>					○	○				
	クロヒカゲ	<i>Lethe diana</i>								○	○	
	クロノマチョウ	<i>Melanitis phedima</i>			○		○					○
	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitschii</i>			○	○		○	○	○		
	コムスジ	<i>Neptis sappho</i>			○		○	○				
	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum</i>		○	○	○	○					○
	イシガケチョウ	<i>Cyrestis thyodamas</i>										△
	ゴマダラチョウ	<i>Hestina persimilis japonica</i>						○				
シジミチョウ科	ツマグロヒヨウモン	<i>Argyreus hyperbius</i>					○	○		○	○	
	テングチョウ	<i>Libythea celtis</i>		○	○							
	ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta paracuta</i>							○			
	ムラサキシジミ	<i>Narathura japonica</i>							○			○
	ムラサキツバメ	<i>Narathura bazalus</i>						○				
	アカシジミ	<i>Japonica lutea</i>			○							
	ヤマトシジミ	<i>Zizeeria maha</i>			○	○		○	○	○	○	
	ウラナミシジミ	<i>Lampides boeticus</i>										○
	ツバメシジミ	<i>Everes argiades</i>					○		○			
	ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus</i>		○								
セセリチョウ科	ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas</i>				○	○					○
	イチモンジセセリ	<i>Pamara guttata</i>							○	○		
	キマダラセセリ	<i>Potanthus flavus</i>							○	○		

表13. 2019年4月から12月にかけて千石荘において確認されたチョウ類

「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日	4月 9日	5月 2日	6月 13日	7月 25日	8月 6日	9月 10日	10月 8日	11月 5日	12月 3日
アゲハチョウ科	ナミアゲハ	<i>Papilio xuthus</i>		○	○	○	○	○	○	○		
	ナガサキアゲハ	<i>Papilio memnon</i>			○	○	○		○			
	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon</i>			○		○	○	○			
シロチョウ科	キタキチョウ	<i>Eurema mandarina</i>		○			○	○			○	○
	モンキチョウ	<i>Colias erate</i>			○	○					○	
	モンシロチョウ	<i>Pieris rapae</i>		○	○	○	○	○	○	○	○	
	ツマキチョウ	<i>Anthocharis scolymus</i>		○								
タテハチョウ科	ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus</i>			○	○	○	○		○		
	ヒカゲチョウ	<i>Lethe sicelis</i>				○			○			
	クロノマチョウ	<i>Melanitis phedima</i>								○		○
	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitschii</i>			○	○	○	○	○			
	コムスジ	<i>Neptis sappho</i>			○	○	○		○			
	アサマイチモンジ	<i>Limenitis gloriifica</i>					○					
	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum</i>		○								○
	ツマグロヒヨウモン	<i>Argyreus hyperbius</i>			○	○	○	○				○
	テングチョウ	<i>Libythea celtis</i>		○		○	○					
	ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta paracuta</i>							○			
シジミチョウ科	ムラサキシジミ	<i>Narathura japonica</i>				○	○					
	ヤマトシジミ	<i>Zizeeria maha</i>			○	○	○	○	○	○	○	
	ウラナミシジミ	<i>Lampides boeticus</i>							○	○		○
	ツバメシジミ	<i>Everes argiades</i>						○				
	ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus</i>		○		○						
	ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas</i>				○						
セセリチョウ科	ダイミョウセセリ	<i>Daimio tethys</i>							○			
	イチモンジセセリ	<i>Pamara guttata</i>							○	○		
	チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias</i>							○	○	○	



表14. 2020年4月から12月にかけて千石荘において確認されたチョウ類

「△」印は幼虫、「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日											
			4月 9日	5月 6日	6月 9日	7月 2日	8月 4日	9月 8日	10月 1日	11月 4日	12月 3日			
アゲハチョウ科	ナミアゲハ	<i>Papilio xuthus</i>		○	○	○	○	○	○	○				
	キアゲハ	<i>Papilio machaon</i>		○										
	クロアゲハ	<i>Papilio protenor</i>					○	○						
	ナガサキアゲハ	<i>Papilio memnon</i>					○		○					
	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon</i>				○	○	○						
シロチョウ科	キタキチョウ	<i>Eurema mandarina</i>	○			○	○	○				○		
	モンキチョウ	<i>Colias erate</i>			○									
	モンシロチョウ	<i>Pieris rapae</i>	○		○	○	○		○	○	○	○		
タテハチョウ科	ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus</i>		○		○	○	○	○					
	ヒカゲチョウ	<i>Lethe sicelis</i>			○	○	○							
	クロノマチョウ	<i>Melanitis phedima</i>		○						○				
	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitschii</i>		○				○	○					
	コムスジ	<i>Neptis sappho</i>		○				○	○					
	アサマイチモンジ	<i>Limnitis glorifica</i>				○								
	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum</i>	○		○						○	○		
	ツマクロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius</i>	○			○	○				○	○		
	テングチョウ	<i>Libythea celtis</i>	○	△○	○		○							
	シジミチョウ科	ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta paracuta</i>							○				
ムラサキシジミ		<i>Narathura japonica</i>							○		○			
ヤマトシジミ		<i>Zizeeria maha</i>				○	○					○		
ウラナミシジミ		<i>Lampides boeticus</i>								○	○			
ツバメシジミ		<i>Everes argiades</i>		○	○		○	○				○		
ルリシジミ		<i>Celastrina argiolus</i>	○											
ベニシジミ		<i>Lycaena phlaeas</i>	○		○	○					○	○		
セセリチョウ科	イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata</i>							○		○			
	チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias</i>							○	○				
	キマダラセセリ	<i>Potanthus flavus</i>							○					

表15. 2021年4月から12月にかけて千石荘において確認されたチョウ類

「△」印は幼虫、「○」印は成虫による確認であることを示す。

科	種	学名	調査日											
			4月 6日	5月 6日	6月 3日	7月 6日	8月 6日	9月 13日	10月 14日	11月 2日	12月 5日			
アゲハチョウ科	ナミアゲハ	<i>Papilio xuthus</i>						○	○					
	キアゲハ	<i>Papilio machaon</i>							○					
	クロアゲハ	<i>Papilio protenor</i>			○						△○			
	ナガサキアゲハ	<i>Papilio memnon</i>		○			○							
	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon</i>		○		○	○							
シロチョウ科	キタキチョウ	<i>Eurema mandarina</i>		○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	モンキチョウ	<i>Colias erate</i>			○		○	○	○	○	○			
	モンシロチョウ	<i>Pieris rapae</i>	○	○	○	○		○	○	○	○			
タテハチョウ科	ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus</i>		○	○	○	○	○	○					
	ヒカゲチョウ	<i>Lethe sicelis</i>			○	○	○	○	○					
	クロヒカゲ	<i>Lethe diana</i>			○		○							
	クロノマチョウ	<i>Melanitis phedima</i>									○			
	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitschii</i>		○	○			○	○					
	コムスジ	<i>Neptis sappho</i>		○		○	○	○	○					
	アサマイチモンジ	<i>Limnitis glorifica</i>			○	○								
	ルリタテハ	<i>Kaniska canace</i>								○				
	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum</i>		○	○		○			○	○			
	ツマクロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius</i>		○		○	○	○	○	○	○			
シジミチョウ科	テングチョウ	<i>Libythea celtis</i>						○						
	ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta paracuta</i>						○		○				
	ヤマトシジミ	<i>Zizeeria maha</i>		○		○		○						
	ウラナミシジミ	<i>Lampides boeticus</i>						○	○	○	○			
	ツバメシジミ	<i>Everes argiades</i>				○	○		○					
	ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus</i>			○									
	ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas</i>	○	○	○	○								
セセリチョウ科	イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata</i>			○				○					
	チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias</i>									○			
	コチャバネセセリ	<i>Thoressa varia</i>		○		○	○							
	キマダラセセリ	<i>Potanthus flavus</i>				○			○					

ツマキチョウは2019年4月に確認され、2011年以来の未確認期間が途切れた。その他、4年間で1回だけ確認された種は、ルリタテハ（2021年10月）、イシガケチョウ（2018年6月、幼虫として）、ゴマダラチョウ（2018年8月）、ムラサキツバメ（2018年8月）、アカシジミ（2018年5

月)、ダイミョウセセリ（2019年9月）であった。

夜間に行った調査ではないので、千石荘の蛾類相の偏ったリストではあるが、表16に4年間に確認した19科55種のが類のリストを示した。

表16. 2018年から2021年にかけて千石荘で確認されたガ類

「△」印は幼虫、「○」印は成虫での確認を示す。

科	種	学名	2018年	2019年	2020年	2021年
ヒゲナガガ科	ホソオビヒゲナガ	<i>Nemophora aurifera</i>	○		○	
ヒロズコガ科	マルハマダラヒロズコガ	<i>Gaphara conspersa</i>	△			△
ミノガ科	チャミノガ	<i>Eumeta minuscula</i>	△	△	△	
	オオミノガ	<i>Eumeta variegata</i>	△			
	キノコヒモミノガ	gen. et sp.				△
ハマキガ科	ヨモギネムシガ	<i>Epiblema foenellum</i>				○
スカシバガ科	ムナブトヒメスカシバ	<i>Trichocerota constricta</i>			○	
	コスカシバ	<i>Synanthedon hector</i>				○
ハマキモドキガ科	コウソハマキモドキ	<i>Choreutis hylligenes</i>	○			○
	イヌビワハマキモドキ	<i>Choreutis japonica</i>		○		
マダラガ科	ホタルガ	<i>Pidorus atratus</i>	○			○
	タケノホソクロバ	<i>Artona martini</i>	○	○		
	キスジホソマダラ	<i>Balataea gracilis gracilis</i>		○	○	
イラガ科	アオイラガ	<i>Parasa consocia</i>	△			
	クロシタアオイラガ	<i>Parasa sinica</i>		△		
メイガ科	ナカアオフトメイガ	<i>Teliphasa elegans</i>				△
ツトガ科	コブノメイガ	<i>Cnaphalocrocis medinalis</i>		○	○	
	シロオビノメイガ	<i>Spoladea recurvalis</i>	○	○	○	
	クロスジキンノメイガ	<i>Pleuroptya balteata</i>	△	○	△	△○
	マエアカスカシノメイガ	<i>Palpita nigropunctalis</i>		○		
	シロアヤヒメノメイガ	<i>Diasemia reticularis</i>		○		
シャクガ科	モンキクロノメイガ	<i>Herpetogramma luctuosale zelleri</i>				○
	ユウマダラエダシャク	<i>Abraxas miranda miranda</i>	○			
	ヨモギエダシャク	<i>Ascotis selenaria cretacea</i>		△		△
	クロスジフユエダシャク	<i>Pachyerannis obliquaria</i>	○			○
	ハスオビエダシャク	<i>Descoreba simplex simplex</i>			○	
	ウラベニエダシャク	<i>Heterolocha aristonaria</i>	○	○	○	○
	マエキヒメシャク	<i>Scopula nigropunctata imbella</i>				○
ツバメガ科	クロオビシロフタオ	<i>Oroplema plagifera</i>	○			
	ギンツバメ	<i>Acropteris iphiata</i>			○	
カギバガ科	モントガリバ	<i>Thyatira batis japonica</i>				△
スズメガ科	ホシホウジャク	<i>Macroglossum pyrrhosticta</i>	○	○		
	キイロスズメ	<i>Theretra nessus</i>		△		
	トビイロスズメ	<i>Clanis bilineata tsingtauca</i>			△	
ドクガ科	マイマイガ	<i>Lymantria dispar japonica</i>		△	△	△
	ゴマフリドクガ	<i>Somena pulvereae</i>		△		
	ドクガ	<i>Artaxa subflava</i>		△		
ヒトリガ科	クワゴマダラヒトリ	<i>Lemyra imparilis</i>	△			
	ヨツボシホソバ	<i>Lithosia quadra</i>		△		
カノコガ科	カノコガ	<i>Amata fortunei fortunei</i>	○			○
ケンモンガ科	キバラケンモン	<i>Trichosea champa</i>	△			
ヤガ科	シマケンモン	<i>Craniophora fasciata</i>			○	
	クサシロキヨトウ	<i>Mythimna loreyi</i>			○	
	ミツボシキリガ	<i>Eupsilia tripunctata</i>			△	
	ヒロバモクメキリガ	<i>Xylena changi</i>			△	
	マエホシヨトウ	<i>Pyrrhidivalva sordida</i>	○			
	ハイイロリンガ	<i>Gabala argentata</i>			○	
	コシロシタバ	<i>Catocala actaea</i>		○		
	マメキンシタバ	<i>Catocala duplicata</i>		○	○	
	ウンモンクチバ属	<i>Mocis</i> sp.			○	○
	フクラスズメ	<i>Arcte coerulea</i>		△	△	△
	ハグルマトモエ	<i>Spirama helicina</i>				○
	アケビコノハ	<i>Eudocima tyrannus</i>				△
	アカエグリバ	<i>Oraesia excavata</i>		○		
	クロキンシアツバ	<i>Hypena amica</i>		△		

キノコヒミノガの幼虫の集団は2011年から5年連続で同じ場所で確認された後、5年間のブランクを経て、2021年に別の場所で確認された。2020年7月に確認されたムナブトヒメスカシバは、自然遊学館に標本がなかった種である。ウンモンクチバ属に関しては、別の調査で、オオウンモンクチバ *Mocis undata* の幼虫が確認されている。速報に掲載しなかったガ類の画像のうち主なものを、図19～24に示した。



図19. ナカアオフトメイガ幼虫  
2021年9月13日



図20. キバラケンモン幼虫  
2018年7月2日



図21. ヒロバモクメキリガ幼虫  
2020年5月6日



図23. ホソオビヒゲナガ  
2018年5月22日



図23. ハイロリンガ  
2020年7月2日



図24. コシロシタバ  
2019年9月10日

## 8. ハチ目

ハチガタハバチは、貝塚市内ではこれまでに和泉葛城山でしか確認されていなかったが（吉田・岩崎、2012）、今回の調査では、2021年5月に確認され、さらに6月にも、1個体ずつであるが確認された。

ハチ目を撮影した画像は少なく、そのほとんどを速報に掲載しているのので、右の画像は動画から抜粋したものである（図25）。

ハチ目に関しても、ハエ目と同じく、同定できなかったものが大半である。特にコマユバチ科、ヒメバチ科、コバチ類、ハナバチ類で、リストにあげられなかったものが多数ある。従って、スズメバチ科7種やアリ科18種以外の科では、種数に関してはほとんど意味がない（表17）。



図25. スジボソコシブトハナバチ  
(2018年8月2日)  
アキノタムラソウ *Salvia japonica*

表17. 2018年から2021年にかけて千石荘で確認されたハチ目

属まで同定できたものを掲載した。  
「○」印は成虫、「ゴール」は虫えいでの確認を示す。

科	種	学名	2018年	2019年	2020年	2021年	
ミフシハバチ科	カタアカチュウレンジ	<i>Arge rejecta</i>		○	○		
	ルリチュウレンジ	<i>Arge similis</i>	○				
ハバチ科	ナガゼンマイハバチ	<i>Strongylogaster secunda</i>		○	○		
	ハクロハバチ	<i>Allantus luctifer luctifer</i>		○		○	
	セグロカブラハバチ	<i>Athalia infumata</i>				○	
	ニホンカブラハバチ	<i>Athalia japonica</i>	○	○	○		
	イヌノフグリハバチ	<i>Athalia kashmirensis</i>		○			
	クロハバチ	<i>Macrophya ignava</i>		○			
	ハチガタハバチ	<i>Tenthredo matsumurai</i>				○	
タマバチ科	バラハタマバチ	<i>Diplolepis japonica</i>			ゴール	ゴール	
ナガコバチ科	シロオビタマゴバチ	<i>Mesocomys albitarsis</i>	○				
ベッコウバチ科	ベッコウバチ	<i>Cyphononyx dorsalis</i>	○	○		○	
ツチバチ科	キンケハラナグツチバチ	<i>Campsomeris prismatica</i>	○				
ドロバチ科	スズバチ	<i>Eumenes decorata</i>	○	○			
	エントツドロバチ	<i>Orancistrocerus drewseni</i>	○巢	○		○	
スズメバチ科	オオスズメバチ	<i>Vespa mandarinia</i>	○	○	○	○	
	コガタスズメバチ	<i>Vespa analis</i>		○		○	
	ヒメスズメバチ	<i>Vespa ducalis</i>			○		
	セグロアシナガバチ	<i>Polistes jadwigae</i>	○	○		○	
	キアシナガバチ	<i>Polistes rothneyi</i>			○	○	
	ヤマトアシナガバチ	<i>Polistes japonicus</i>	○			○	
	キボシアシナガバチ	<i>Polistes mandarinus</i>		○			
	アリ科	オオハリアリ	<i>Pachycondyla chinensis</i>		○		
クロナガアリ		<i>Messor aciculatus</i>			○	○	
ヒメアリ		<i>Monomorium intrudens</i>	○	○			
ヤマトアシナガアリ		<i>Aphaenogaster japonica</i>	○	○	○	○	
ハリフトシリアゲアリ		<i>Crematogaster matsumurai</i>	○	○	○	○	
テラニシシリアゲアリ		<i>Crematogaster teranishii</i>				○	
クボミシリアゲアリ		<i>Crematogaster vagula</i>	○				
キイロシリアゲアリ		<i>Crematogaster osakensis</i>	○	○	○		
ムネボソアリ		<i>Temnothorax congruus</i>	○	○		○	
アミメアリ		<i>Pristomyrmex punctatus</i>	○	○	○	○	
トビイロシワアリ		<i>Tetramorium tsushimae</i>	○				
ルリアリ		<i>Ochetellus glaber</i>	○	○	○	○	
シベリアカタアリ		<i>Dolichoderus sibiricus</i>	○	○			
クサアリモドキ		<i>Lasius spathepus</i>	○			○	
トビイロケアリ		<i>Lasius japonicus</i>	○	○	○	○	
ウメマツオオアリ		<i>Camponotus vitiuosus</i>	○	○	○	○	
クロヤマアリ		<i>Formica japonica</i>	○	○	○	○	
アメイロアリ		<i>Paratrechina flavipes</i>		○	○		
アナバチ科		ミカドジガバチ	<i>Hoplammophila aemulans</i>		○		
		ツチスガリ	<i>Cerceris hortivaga</i>		○		
コハナバチ科		アカガネコハナバチ	<i>Halictus aerarius</i>			○	
ヒメハナバチ科		ヒメハナバチ属	<i>Andrena sp.</i>				○
ミツバチ科		ダイミョウキマダラハナバチ	<i>Nomada japonica</i>		○		
	キマダラハナバチ属	<i>Nomada sp.</i>	○				
	クマバチ	<i>Xylocopa appendiculata circumvolans</i>	○	○	○	○	
	シロスジヒゲナガハナバチ	<i>Eucera spurcatipes</i>		○	○	○	
	スジボソシフトハナバチ	<i>Amegilla florea</i>	○				
	ニホンミツバチ	<i>Apis cerana japonica</i>			○	○	
	セイヨウミツバチ	<i>Apis mellifera</i>	○	○	○	○	

## 9. その他の目

ナナフシ目は、2018年4月にナナフシモドキ *Ramulus, mikado* (幼虫)、ゴキブリ目は、2018年5月にモリチャバネゴキブリ *Blattella nipponica*、シロアリ目は、2020年4月と8月、2021年5月にヤマトシロアリ *Reticulitermes speratus* (コロニー)、およびハサミムシ目は、4年とも、ヒゲジロハサミムシ *Gonolabis marginalis* を確認した。その中で、2019年6月に確認したヒゲジロハサミムシのメス成虫は卵塊を保護していた。

アミメカゲロウ目では、2018年5月にイツホシアカマダラクサカゲロウ *Pseudomallada cognatellus*、2018年8月にアミメクサカゲロウ *Apochrysa matsumurae*、2020年8月にミドリヒメ



カゲロウ *Notiobiella subolivacea*、2021年6月にヤマトクサカゲロウ *Chrysoperla nipponensis* を確認した。また、2019年の「千石荘講座」では、12月13日にラクダムシ *Inocellia japonica* の幼虫が確認されている（貝塚市立自然遊学館、2021）。最後に、トビケラ目では、2020年の4月と5月にナミコガタシマトビケラ *Cheumatopsyche infascia* を1個体ずつ確認した。

### 10. 大阪府レッドリスト種と注目種

2011年からの11年間の調査で確認された大阪府レッドリスト種、および注目種を表18にまとめた。注目種には、里山的環境を代表する種、2014年の大阪府レッドリストの改定でランク外とされた種、および侵入した外来種（国内外来種を含む）など雑多なものが含まれている。本文中でも述べたことであるが、月1回の調査では、かなりな「見落とし」があると推測されるので、その点は考慮いただきたい。

表18. 2011年から2021年にかけて千石荘で確認された大阪府レッドリスト種および注目種

目	科	種	学名	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
<b>絶滅危惧Ⅱ類</b>														
トンボ目	トンボ科	ナニワトンボ	<i>Sympetrum gracile</i>				○							
<b>準絶滅危惧</b>														
トンボ目	イトトンボ科	ベニイトトンボ	<i>Ceragrion nipponicum</i>			○	○	○	○					
		キイトンボ	<i>Ceragrion melanurum</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	サナエトンボ科	ウチワヤンマ	<i>Sinictinogomphus clavatus</i>						○	○	○	○	○	○
	ヤンマ科	サラサヤンマ	<i>Sarasaeschna pryeri</i>										○	○
	トンボ科	アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i>			○					○	○	○	○
		ノシメトンボ	<i>Sympetrum infuscatum</i>	○	○									
		ヨツボシトンボ	<i>Libellula quadrimaculata asahinai</i>					○			○			
バッタ目	コオロギ科	ナツノツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus grylloides</i>				○	○	○	○	○	○	○	○
コウチュウ目	テントウムシ科	ジュウサンホシテントウ	<i>Hippodamia tredecimpunctata</i>							○				
チョウ目	セセリチョウ科	ホソバセセリ	<i>Isoteinon lamprospilus lamprospilus</i>				○							
	コバガ科	ウスアオリンガ	<i>Paracrama angulata</i>					○	○					
<b>注目種</b>														
トンボ目	サナエトンボ科	タイウンウチワヤンマ	<i>Ictinogomphus pertinax</i>								○	○		○
	トンボ科	マユタテアカネ	<i>Sympetrum eroticum eroticum</i>											○
バッタ目	マツムシ科	マツムシ	<i>Xenogryllus marmoratus</i>	○	○			○			○	○		
		カンタン	<i>Oecanthus longicauda</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	オンブバッタ科	アカハネオンブバッタ	<i>Atractomorpha sinensis sinensis</i>							○	○	○	○	○
	バッタ科	シヨウリョウバッタモドキ	<i>Gonista bicolor</i>					○	○	○	○	○	○	○
カマキリ目	ヒメカマキリ科	サツマヒメカマキリ	<i>Acromantis australis</i>		○	○		○					○	
		ヒメカマキリ	<i>Acromantis japonica</i>				○							
ナナフシ目	ナナフシ科	ナナフシモドキ	<i>Ramulus mikado</i>	○		○				○	○			
カメムシ目	セミ科	ミンミンゼミ	<i>Hyalessa maculaticollis</i>	○								○		
		チツチゼミ	<i>Kosemia radiator</i>		○	○	○	○						
	ハゴロモ科	チュウゴクアミガサハゴロモ	<i>Pochazia shantungensis</i>											○
	カスミカメムシ科	クスベニヒラタカスミカメ	<i>Mansoniella cinnamomi</i>					○	○	○		○		
アミメカゲロウ目	クサカゲロウ科	アミメクサカゲロウ	<i>Nacaura matsumurae</i>		○	○	○			○	○			
	ラクダムシ科	ラクダムシ	<i>Inocellia japonica</i>	○										
コウチュウ目	ハンミョウ科	コハンミョウ	<i>Cicindela specularis</i>	○		○								
	クワガタムシ科	ヒラタクワガタ	<i>Serrognathus platymelus</i>											○
	コガネムシ科	カブトムシ	<i>Trypoxylus dichotomus</i>		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	テントウムシ科	ムネアカオオクロテントウ	<i>Synona consanguinea</i>								○			
	ハムシ科	ヨツモンカメノコハムシ	<i>Lacoptera quadrimaculata</i>										○	○
ハエ目	シギアブ科	キアシキンシギアブ	<i>Chrysopilus ditissimis</i>	○	○			○					○	○
	ハナアブ科	ハチモドキハナアブ	<i>Monoceromyia pleuralis</i>	○	○	○								
チョウ目	シロチョウ科	ツマキチョウ	<i>Anthocharis scolymus</i>	○								○		
	シジミチョウ科	ミズイロオナガシジミ	<i>Antigius attila</i>				○							
	ヤガ科	コシロシタバ	<i>Catocala actaea</i>		○	○						○		
ハチ目	コンプトハナバチ科	ニッポンヒゲナガハナバチ	<i>Tetralonia nipponensis</i>						○					
		シロスジヒゲナガハナバチ	<i>Eucera spurcatipes</i>	○								○	○	○
	ミツバチ科	ニホンミツバチ	<i>Apis cerana</i>	○				○					○	○

注目種のうち、アカハネオンブバッタ、チュウゴクアミガサハゴロモ、クスベニヒラタカスミカメ、ムネアカオオクロテントウ、ヨツモンカメノコハムシは外来種（国内外来種を含む）

単発的に確認されている種はともかく、例えば、ベニイトトンボ、チツチゼミ、ハチモドキハナアブのように連続して確認されていたものが確認されなくなったり、反対に、ウチワヤンマやナツノツヅレサセコオロギのように以前は確認されていなかったものが連続して確認されるようになった場合には、月1回の調査でも、ある程度の傾向を読み取れるのかもしれない。

千石荘では、病院跡地の更地化工事や外周路の貫通、牛神池の水位低下、ナラ枯れの顕在化、カエンタケの発生など、この4年間だけでも自然環境は大きく変わってしまった。すでに外周路に沿って、オオブタクサやナルトサワギク *Senecio madagascariensis* などの外来植物の繁茂が確認されている。せんごくの杜ではコナラやクヌギとクスノキの樹高が拮抗する状況にあったのに（上久保ほか、2020）、ナラ枯れによってクスノキの優占度が高くなることは確実である。せんごくの杜を中心とした里山的環境を守り、後世に残していくためには、貝塚市立自然遊学館（2015）によって提言された「千石荘周辺の動植物とその保全について」に沿った維持管理が求められる。特に、南北に走る舗装道路の東側に草原を創出するという提案は、現在および今後の千石荘における生態系のバランスを考えた場合に的を射たものであると考えられる。

## 謝辞

標本の同定に協力していただいた澤田義弘、天満和久、森康貴の各氏、千石荘の動植物に関する情報を頂いた秋武仁志、北田誠、佐々木仁、白木江都子、藤村雅志、山口隼平、山田浩二、湯浅幸子、吉田元三郎の各氏、せんごくの杜のボランティアの方々、および本稿を校閲していただいた自然遊学館の職員の方々に謝意を表す。

## 引用文献・参考文献・参考サイト

- 石井 実・青柳正人・岩崎 拓・中谷至伸・上田達也（1997） 貝塚市千石堀城址周辺の昆虫。「貝塚市自然環境調査報告書（1996年度）」、pp. 31-46、貝塚市立自然遊学館。
- 稲津和之・西田昭夫（2011） トビケラ目。『兵庫の川の生き物図鑑』（兵庫陸水生物研究会）：169-212。
- 岩崎 拓（2013） 千石荘の昆虫（2011年度調査）。貝塚の自然 第15号：5-14。
- 岩崎 拓（2016） 千石荘の昆虫（2012-2013年度調査）。貝塚の自然 第17号：74-87。
- 岩崎 拓（2017） 千石荘昆虫調査2016。自然遊学館だより No.83：18-20。
- 岩崎 拓（2018a） 千石荘昆虫調査2017。自然遊学館だより No.88：12-14。
- 岩崎 拓（2018b） 千石荘の昆虫（2014-2015年度調査）。貝塚の自然 第19号：66-80。
- 岩崎 拓（2019） 千石荘昆虫調査2018。自然遊学館だより No.90：12-13。
- 岩崎 拓（2020a） 千石荘でオオキトンボを採集。自然遊学館だより No.94：7-8。
- 岩崎 拓（2020b） 千石荘の昆虫（2016-2017年度調査）。貝塚の自然 第21号：39-54。
- 岩崎 拓（2020c） 千石荘昆虫調査2019。自然遊学館だより No.96：11-13。
- 上久保文貴・湯浅幸子・岩崎 拓（2016） 千石荘植物調査（2012-2013年度）。貝塚の自然 第17号：44-73。
- 上久保文貴・湯浅幸子・白木江都子・鈴木勝也・岩崎 拓（2020） 千石荘樹木調査（2012-2018年）。貝塚の自然 第20号：1-22。

- 大阪府 (2014) 『大阪府レッドリスト2014』. 48pp.、大阪府環境農林水産部みどり・都市環境室.
- 河添純子 (2020) ヨツモンカメノコハムシ. 自然遊学館だより No. 96 : 3-4.
- 環境庁 (1997) 都道府県別メッシュマップ 27 大阪府. 36pp.、環境庁自然保護局計画課自然環境調査室.
- 貝塚市立自然遊学館 (2015) 千石荘周辺の動植物とその保全について. 貝塚市立自然遊学館報 No. 1 (2013 年度) : 7-12.
- 貝塚市立自然遊学館 (2017) 千石荘昆虫調査 (講座) 2015. 貝塚市立自然遊学館報 No. 3 (2015 年度) : 4-8.
- 貝塚市立自然遊学館 (2018) 千石荘昆虫調査 (講座) 2016. 貝塚市立自然遊学館報 No. 4 (2016 年度) : 4-11.
- 貝塚市立自然遊学館 (2019) 千石荘昆虫調査 (講座) 2017. 貝塚市立自然遊学館報 No. 5 (2017 年度) : 4-11.
- 貝塚市立自然遊学館 (2020a) 千石荘昆虫調査 (講座) 2018. 貝塚市立自然遊学館報 No. 6 (2018 年度) : 4-10.
- 貝塚市立自然遊学館 (2020b) 寄贈標本. 自然遊学館だより No. 96 : 13-16. (<昆虫> 藤村雅志、エゾトンボ羽化殻 1 点、貝塚市名越、2020 年 6 月 9 日).
- 貝塚市立自然遊学館 (2021) 千石荘昆虫調査 (講座) 2019. 貝塚市立自然遊学館報 No. 7 (2019 年度) : 4-11.
- 気象庁・気象統計 <https://www.jma.go.jp/jma/menu/menureport.html> (2024 年 1 月)
- 神戸のトンボ <https://www.odonata.jp/index.html> (2024 年 1 月)
- 昆虫エクスペローラー <https://www.insects.jp/> (2024 年 1 月)
- 澤田智子 (2021) せんごくの杜昆虫調査／楽しい昆虫調査イベントへの試行錯誤. 自然遊学館だより No. 98 : 4-6.
- 初宿成彦 (2021) 大阪市立自然史博物館・外来生物調査プロジェクト (Project A) によるムネアカオオクロテントウ・ユーカリハムシ・ヨツモンカメノコハムシの市民調査報告. *Bulletin of the Osaka Museum of Natural History*, No. 75 : 53-77.
- 竹内正人 (2009) 『写真集 ハナアブ 300』、双翅目談話会、300pp. (+日本のハナアブ科暫定リスト 8pp. +和名索引 4pp.)
- 天満和久 (2021) オオキンカメムシの 2 齢幼虫の寿命. 自然遊学館だより No. 100 : 19-21.
- みんなで作る日本産蛾類図鑑 V2 <http://www.jpmoth.org/> (2024 年 1 月)
- 村井貴史・伊藤ふくお (2011) 『バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑』、日本直翅類学会監修、北海道大学出版会、449pp.
- 安永智秀・高井幹夫・山下 泉・川村 満・川澤哲夫 (2000) 『日本原色カメムシ図鑑』、友国雅章監修、全国農村教育協会、380pp.
- 山口隼平 (2018) アカマダラハナムグリ ～台風が呼んだ希少種との出会い～. 自然遊学館だより No. 89 : 1-2.
- 湯川淳一・榊田 長編著 (2002) 『日本原色虫えい図鑑』(初版第 3 刷)、全国農村教育協会、826pp.
- 吉田浩史・岩崎 拓 (2012) 大阪府貝塚市のハバチ亜目. 貝塚の自然 第 14 号 : 37-46.

## 付図

2018 年から 2021 年までの各調査日 (12 月を除く) に作成した調査速報を、以下に掲載した。昆虫以外の動物、植物、および景観に関する情報も記述している。アミガサハゴロモ近似種という表記は当時のままとした。

「千石荘」昆虫調査速報（2018年4月）

2018年4月10日 天候：晴れ 調査者1名

ヤマザクラの花は散ってしまいました。コナラ林の新緑は春本番といった感じです。地面近くでは、クサイチゴの白い花が目立ちます。アケビ、ヘビイチゴ、ムラサキケマン、クサノオウなどの花も咲いていました。



チョウ目 チョウ類7種

チョウ類は、ナミアゲハ、モンキチョウ、モンシロチョウ、キタキチョウ、キタテハ、テングチョウ、ルリシジミの7種を確認しました。この中では、テングチョウの個体数が最多でした。ガ類の確認は少なく、成虫はタケノボシクワバ、幼虫はクワゴマダラヒトリだけでした。



テングチョウ

バッタ目など

草間にヤブキリの幼虫が多くいました。ツチイナゴは1みだけ自然遊学館の展示用に採集しました。バッタ目は3種で、近いグループを合せても、ナナフシモドキのふ化したての幼虫、だんじりの駒の下でヒゲジロハサミムシを確認しただけでした。



ヤブキリ幼虫

コウチュウ目

岸和田市や熊取町ではすでに記録があり、市内で探し続けていたムネアカオオクロテントウをようやく見つけました。先週からマルカメムシがやたらと集まっているヤマザクラがあり、その葉上に1個体だけいました。マルカメムシの幼虫を捕食することを後から知りました。



ムネアカオオクロテントウ

ハチ目

ハチの仲間は、すぐには種類が分かりません。撮影して採集して展覧標本にして、天満和久さんに同定してもらいました。その他、クマバチやキマダラハナバチ属といったハナバチ類や、数種類のアリを確認しましたが、その中ではクボミシリアゲアリがやや稀な種でした。



ヒラタハチ科の一種

「千石荘」昆虫調査速報（2018年5月）

2018年5月22日 天候：晴れ 調査者1名

先月より花が少なくなりましたが、スイカズラやドクダミ、牛神池のアンペライ、樹木ではネジキなどが咲き始めました。田植え前の田んぼでは、ケリが数羽いて、近づくと、けたたましく鳴き立てられました。



チョウ目 チョウ類11種

チョウ類は、ナガサキアゲハ、モンキチョウ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、サトキマダラヒカゲ、クロノコマチョウ、コムシジ、キタテハ、テングチョウ、アカシジミ、ヤマトシジミの11種、ガ類では、ホソオビヒゲナガやウラベニエダシヤクなどを確認しました。



アカシジミ

トンボ目

ショウジョウトンボのひはまだまだ未成熟で橙黄色で、赤色になっていません。コシアキトンボとシオカラトンボは、体色が鮮やかになってきました。牛神池ではギンヤンマがバトロールし、目当てのヨツボシトンボも、腹面からながら遠望で撮影できました。



ヨツボシトンボ

バッタ目

ヤブキリとコバネイナゴはまだ幼虫、トノサマバッタは一部がすでに成虫になっていました。牛神池の岸辺でキンヒバリが鳴いていましたが、なかなか姿を見ることができません。成虫越冬のクビキリギスとツチイナゴは活発になり、繁殖OKのようです。



クビキリギス

コウチュウ目

樹木の名札の裏には、コウチュウ目に限らず、結構いろいろな虫が隠れています。今回はコムシアシジミシダマシとクチキムシを見つけました。写真のアカガネサルハムシは、種名と体色のイメージが一致しないので、いつも図鑑を見直すことになります。



アカガネサルハムシ

「千石荘」昆虫調査速報（2018年6月）

2018年6月4日 天候：晴れ 調査者1名

水田に水が入りました。もうすぐ田植えです。大井谷池の堤の草が刈られています。年に2、3回の草刈りをすると、タヌキマメやツリガネニンジンの生息環境が保たれます。林床に生えるコクランは蕾でした（右の写真）。



チョウ目 チョウ類（成虫9種・幼虫1種）

チョウ類の成虫は、ナミアゲハ、アオスジアゲハ、キタキチョウ、モンシロチョウ、ヒメジャノメ、サトキマダラヒカゲ、キタテハ、ベニシジミ、ヤマトシジミの9種、幼虫は、イヌビワの葉上にイシガケチョウの幼虫を2個体確認しました。まだ中齢の幼虫でした。



イシガケチョウ幼虫

トンボ目 7種

牛神池では、クロイトトンボ（交尾ペア）、ギンヤンマ、ショウトンボ、コシアキトンボ、大井谷池では、ウチワヤンマ、オオヤマトンボ、シオカラトンボ、コシアキトンボを確認しました。ウチワヤンマは大阪府レッドリストで準絶滅危惧に指定されています。



ウチワヤンマ

バッタ目

キンヒバリとカヤヒバリの鳴き声を聞きました。ツチイナゴとクビキリギスは成虫越冬です。ハネナシコロギスは幼虫で越冬し、この時期に成虫になります。成虫になっても翅は生えませんが、赤味がかかった色になるのが特徴です。その他、キリギリスやヤブキリなどの幼虫を確認しました。



ハネナシコロギス

コウチュウ目

クヌギの樹液は出ていませんが、アカメガシワの幼木にコクワガタがハリブトシリアゲアリの群れと一緒にいました。この時期から活動が始まるんですね。その他はマメコガネ、ナミテントウ、キイロテントウ、クチキムシ、クロウリハムシなど常連の種ばかりでした。



コクワガタ

「千石荘」昆虫調査速報（2018年7月）

2018年7月2日 天候：晴れ（雨後） 調査者1名

水田に水がはられ、イネも少し背が高くなり、風景が緑一色に近づいてきました。花は少なくなりましたが、林縁ではドクダミ、林床ではコクランの花（右の写真）が少し残っていました。



チョウ目 チョウ類11種

チョウ類では、クロアゲハ、アオスジアゲハ、ヒカゲチョウ、クロノコマチョウ、キタテハ、コムシジ、ベニシジミ、ツバメシジミなどを確認しました。ガ類では、ネザサの葉上にクロオビシロフタオ、ソメイヨシノの小枝にキバラケンモンの幼虫などを確認しました。



クロオビシロフタオ

トンボ目 6種

ロータリーからの切通しや林内では、ハグロトンボの飛翔が目立ちました。牛神池では、キイトンボを10個体以上、確認しました。その他、ギンヤンマ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、コシアキトンボの合計6種を確認しました。



キイトンボ

カマキリ目など

ハラビロカマキリ1個体、オオカマキリ4個体、チョウセンカマキリ2個体を確認しました。いずれも幼虫です。バッタ目では、ヤブキリ、キリギリス、カヤヒバリ、キンヒバリ、マダラスズ、シバズ、ナツノツツシサセコオロギの鳴き声を聞きました。



ハラビロカマキリ幼虫

カメムシ目

ニイニゼミが鳴き始めました。クマゼミは4日前には鳴いていたのに、今日は鳴いていませんでした。写真のアヤハリハネナガウカを見たのは初めてで、自然遊学館にも標本がないものでした。体に比べて翅が広く、翅のほとんどの部分が透明なことが特徴です。



アヤハリハネナガウカ



「千石荘」昆虫調査速報（2018年8月）

2018年8月2日 天候：晴れ（雨後） 調査者1名

入道雲をバックに、稲や草の葉が風に揺れ、いかにも夏という景観になりました。気温は38℃、酷暑です。ニイニイゼミ、クマゼミ、アブラゼミや、キリギリスの鳴き声が響きます。ツクツクボウシは少しだけ鳴いていました。



チョウ目 チョウ類12種

チョウ類は、ナガサキアゲハ、ナミアゲハ、アオスジアゲハ、ヒカゲチョウ、コムシジ、ツマグロヒョウモン、ゴマダラチョウ、ムラサキツバメなど12種を確認しました。写真のムラサキツバメは、多数派のムラサキシジミと似ていますが、後翅に尾状突起があることで区別できます。



ムラサキツバメ

トンボ目 9種

ハグロトンボ、アオモンイトトンボ、キイトンボ、ギンヤンマ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、ショウジョウトンボ、チョウトンボ、ウスバキトンボを確認しました。今年は、ベニイトトンボとナニイトトンボを確認できないまま、終わってしまうかもしれません。



ショウジョウトンボ

コウチュウ目など

タマムシが羽音を立てて飛んで行きます。クヌギの樹液には、カブトムシのほか、カナブン、ヨツボシオオクスイ、サトキマサラヒカゲ、ホシアシナガヤセバエが集まっています。少し離れた場所で、キマワリ、ユミアシゴムシダマシ、ナガゴマフカミキリなどを確認しました。



カブトムシ

ハチ目

エントトドロバチ、スズバチ、ベッコウバチが餌を探して飛んでいました。スズボソコシフトハナバチは、アキノタムラソウで盛んに吸蜜していました。腹部背面の4個の白紋から「ヨツボシ何とかアリ」だろうと思ったら、シベリアアカタアリでした。外来種ではありません。



シベリアアカタアリ

「千石荘」昆虫調査速報（2018年9月）

2018年9月6日 天候：くもり 調査者1名

未曾有の災害をもたらした台風21号の通過後2日目に調査に行きました。写真のコナラをはじめ、数本の大木が幹から折れ、折枝や落枝も多数、西側の林縁は荒れた感じになり、周回路も通行困難な箇所がありました。



チョウ目 チョウ類13種

チョウ類は、ナガサキアゲハ、ナミアゲハ、モンシロチョウ、モンキチョウ、ヒメウラナミジャンノメ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ウラギンシジミ、ムラサキシジミ、ヤマトシジミ、ツバメシジミ、イチモンジセセリ、キマダラセセリを確認しました。写真はアオイragの幼虫です。



アオイragの幼虫

トンボ目 6種

アオモンイトトンボ、キイトンボ、ギンヤンマ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、リスアカネを確認しました。どの種も個体数が少なく、特に、キイトンボを1個体しか確認できなかったことが心配です。チョウ類が多かったことと対照的だと感じました。



キイトンボ

バッタ目

樹上からクサヒバリとカナタタキの鳴き声が聞こえます。どうやって台風をやり過ごしたのでしょうか。草上でウスグモスのペアを確認し、地面からは、エンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、ミツカドコオロギなどの鳴き声が聞こえました。



クサヒバリ

カメムシ目

セミの鳴き声は、ツクツクボウシが中心になりました。その他、ニイニイゼミとアブラゼミが少々でした。この時期になると、ヌルデにミミフシという黄緑色の虫こぶができます（ヌルデシロアブラムシ）。クヌギカメムシはオスの外部交尾器の形で「ハラ」や「サジ」と区別がつけます。



クヌギカメムシ

「千石荘」昆虫調査速報（2018年10月）

2018年10月2日 天候：晴れ 調査者1名

水田では稲が実っています。池の堤には、写真のタヌキマメが花を咲かせていました。台風21号の倒木処理に時間をかけているうちに夕方になり、マツムシが鳴き出しました。最後に、舗装道路を横切るアナグマを見ました。



チョウ目 チョウ類9種

チョウ類は、モンシロチョウ、キタキチョウ、ヒメウラナミジャンノメ、クロヒカゲ、サトキマダラヒカゲ、ツマグロヒョウモン、ヤマトシジミ、イチモンジセセリ、キマダラセセリを確認しました。ガ類では、ホタルガや写真のマエホシヨトウなどを確認しました。



マエホシヨトウ

トンボ目 6種

オアオイトトンボ、アオモンイトトンボ、ギンヤンマ、タイウンチウヤンマ、オオシオカラトンボ、ショウジョウトンボを確認しました。切通しや水田付近、大井谷池にはトンボ類がいて、なわばり争いをしている個体もいるのに、牛神池ではまったく見ませんでした。



アオモンイトトンボ

バッタ目

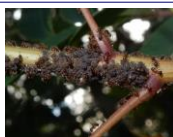
地面からコオロギ類の鳴き声が多く聞こえます。樹上からは、クサヒバリ、アオマツムシ、カナタタキの鳴き声が聞こえます。写真のウスグモスは、見る回数が増えました。池の堤では子ガヤにショウリョウバッタモドキがいます。オンプバッタは「アカハネ」ばかりになりました。



ウスグモス

カメムシ目

セミ類では、ツクツクボウシが1個体だけ鳴いていました。台風で切通しのヌルデがやられて、ヌルデミミフシは少しだけです。写真のハゼアブラムシ（とアミメアリ）は、ヌルデではなく、ハゼノキに付いていました。あとは、アオモンツノカメムシなど常連の種ばかりを確認しました。



ハゼアブラムシ

「千石荘」昆虫調査速報（2018年11月）

2018年11月1日 天候：晴れ 調査者1名

稲刈りが終わり、モズの高鳴き声が聞こえ出すと、いかにも晩秋といった感じになります。池の水面上をカワセミが飛んで行き、美しい羽根を見せてくれました。右の写真は、初めて見たマメ科のエビスグサという外来種です。



チョウ目 チョウ類8種

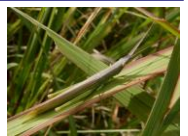
チョウ類は、モンシロチョウ、キタキチョウ、クロヒカゲ、キタテハ、ツマグロヒョウモン、ヤマトシジミ、ウラナミシジミ、ベニシジミを確認しました。ガ類では、チャミノガの幼虫、シロオビノメイガ、ホシホウジャク、写真のコウソハマキモドキなどを確認しました。



コウソハマキモドキ

バッタ目

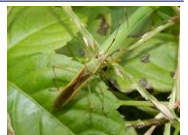
クサヒバリ、カナタタキ、ハラオカメコオロギ、マダラスなどの弱々しい鳴き声が少しだけ聞こえます。オナガササキリはまだ力強く鳴いています。バッタ類では、コバネイナゴとショウリョウバッタモドキが、他の種が減った分、目立つようになりました。



ショウリョウバッタモドキ

カメムシ目

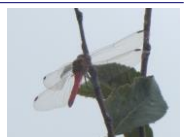
水田の周りでは、例年通り、アカスジカスミカメが大発生していました。それに比べると、セジロウカ、ホソミドリカスミカメ属、ウスモンミドリカスミカメ、クモヘリカメムシは、そこそこ居ても、数で見劣ります。その他、普通種ばかりを確認しました。



クモヘリカメムシ

その他

トンボ目もかなり減りましたが、アキアカネを1個体、撮影することが出来ました。カマキリ目はハラヒロカマキリだけ（2♀と1卵囊）、コウチュウ目はコアオハナムグリだけで、種数で言えば、セイタカアワダチソウから吸蜜していたハナアブ類を含むハエ目優勢でした。



アキアカネ

「千石荘」昆虫調査速報（2019年4月）

2019年4月9日 天候：晴れ 調査者1名

ヤマザクラの花が少し残っていました。クサイチゴの白い花が目立ちますが、タネツクバナも増えました。ムラサキケマン（右の写真）、クサノオウ、ヒメオドリコソウ、ハコベ、ヘビイチゴなども花を咲かせていました。



チョウ目 チョウ類8種

チョウ類は、**ナミアゲハ**、**モンシロチョウ**、**ツマキチョウ**、**キタキチョウ**、**キタテハ**、**テングチョウ**、**ベニシジミ**、**ルリシジミ**の8種を確認しました。**ツマキチョウ**は2011年以来確認がなくて心配していたので、ほっとしました。幼虫の食草は、**タネツクバナ**、**ナスナ**、**ダイコン**などです。



ツマキチョウ

カメムシ目

ケヤキ広場の水たまりに、**コセアカアメンボ**が数匹いました。大きな池より、小さな水たまりの方が好きなのかもしれません。カラスノエンドウには**ソラメヒゲナガアブラムシ**がコロニーを作っていました。その他、**ナガメ**や**ミツボシツチカメムシ**などを確認しました。



コセアカアメンボ

ハチ目

ハバチ類で種が分かるのは、**ナガスギナハバチ**と**イヌノフグリハバチ**だけでした。クサイチゴの花には**シロスジヒゲナガハナバチ**などのハナバチ類が訪れていました。大抵は種が分からないのですが、このハナバチは触角が立派です。アリ類は3種だけ確認しました。



シロスジヒゲナガハナバチ

ハエ目

**ビロードツリアブ**のホバリングは、この時期によく見かける代表的なシーンです。ハナアブ類は、**アシブトハナアブ**、**オオハナアブ**、**シマハナアブ**、**ホソヒラタアブ**という普通種ばかりでした。その他、**ヒゲナガヤチハエ**、**ツマグロキンバエ**、**オオクワバエ**などを確認しました。



シマハナアブ

「千石荘」昆虫調査速報（2019年5月）

2019年5月2日 天候：晴れ 調査者1名

先月よりは虫の数が増えたものの、まだ本格的な虫のシーズンとは言えません。牛神池でもトンボはまったく見ませんでした。アンペライは少し花が咲き、岸辺に生えたカササゲ（右の写真）は穂を出していました。



チョウ目 チョウ類10種

チョウ類は、**ナミアゲハ**、**ナガサキアゲハ**、**アオスジアゲハ**、**モンキチョウ**、**モンシロチョウ**、**ヒメウラナミジャノメ**、**サトキマダラヒカゲ**、**コムシジ**、**ツマグロヒョウモン**、**ヤマトシジミ**を確認しました。右の写真はヤガ科の**クロキシタアツバ**です。



クロキシタアツバ

カメムシ目

エノキの幹に**トビイロケアリ**が蟻道を作っていて、その空洞中に**ヤノクチナガオオアブラムシ**の幼虫がいました。いわゆる共生関係です。**コセアカアメンボ**は、ケヤキ広場の水たまりに群れていました。その他、**ヨコツナサシガメ**や**ヒゲナガカメムシ**などを確認しました。



ヤノクチナガオオアブラムシ

コウチュウ目

ノイバラの花に見慣れないハナカミキリの仲間が来ていました。自然遊学館に標本がない**ヤツボシハナカミキリ**で、図鑑には山地性の種と書かれていました。千石荘には意外に山地性の種がいることを、竹本卓哉さんが『自然遊学館だより』に書かれていたことを思い出しました。



ヤツボシハナカミキリ

ハチ目

この時期、ガ類の幼虫も多いのですが、ハバチ類の幼虫もけっこう目に付きます。成虫では、写真の**カタアカチュウレンジ**のほか、**クロハバチ**を確認しました。**オオスズメバチ**の女王が水辺で吸水していました。その他、**ダイミョウキマダラハナバチ**などを確認しました。



カタアカチュウレンジ

「千石荘」昆虫調査速報（2019年6月）

2019年6月13日 天候：晴れ 調査者1名

水が入れられた水田の上をツバメが飛び交っていました。でも水の中には外来種のスクミリンゴガイが見えます。大井谷池の堤では、草刈りと火入れの痕がありました。花では、ドクダミとムラサキカタバミが目立っていました。



チョウ目 チョウ類14種

チョウ類は、**ナミアゲハ**、**ナガサキアゲハ**、**モンキチョウ**、**モンシロチョウ**、**ヒメウラナミジャノメ**、**ヒカゲチョウ**、**サトキマダラヒカゲ**、**コムシジ**、**ツマグロヒョウモン**、**テングチョウ**、**ムラサキシジミ**、**ヤマトシジミ**、**ルリシジミ**、**ベニシジミ**を確認しました。



ルリシジミ

トンボ目 8種

一番多くいたのは**コシアキトンボ**です。大井谷池では、今年も**ウチウヤンマ**に出会えました。**キイトンボ**は1個体だけで、出始めの時期なのでしょう。その他、**ギンヤンマ**、**シオカラトンボ**、**オオシオカラトンボ**、**チョウトンボ**、**ショウジョウトンボ**を確認しました。



ウチウヤンマ

カマキリ目・バッタ目

先月はカマキリ目の幼虫を見ず、心配しましたが、今回は、**オオカマキリ**5個体、**チョウセンカマキリ**2個体、**ハラヒロカマキリ**1個体を確認しました。バッタ目では**ナツノツツレサセキンヒバリ**、**カヤヒバリ**の鳴き声を聞きました。**アカハネオンブバッタ**は3♀+1幼虫でした。



ハラヒロカマキリ幼虫

ハチ目

もう**オオスズメバチ**がクヌギの樹液周りで活動を始めていました。**セグロアシナガバチ**と**キボシアシナガバチ**も確認しました。土が露出した崖では、**ミカドジガバチ**が巣に持ち帰る土を大あごで啜えているところでした。**オオハリアリ**が**ヒゲシロハサミムシ**の卵を狙っていました。



ミカドジガバチ

「千石荘」昆虫調査速報（2019年7月）

2019年7月25日 天候：晴れ 調査者1名

梅雨がようやく明け、気温は34℃、セミの鳴き声がひびき、夏らしい様子になりました。水田のイネの葉は伸び、草むらも林も緑一色という感じです。でも、養護学校前ではショベルカーとダンプカーの場違い感が満載でした。



チョウ目 チョウ類13種

チョウ類は、**ナミアゲハ**、**ナガサキアゲハ**、**アオスジアゲハ**、**キタキチョウ**、**モンシロチョウ**、**ヒメウラナミジャノメ**、**サトキマダラヒカゲ**、**コムシジ**、**アサマイチモンジ**、**ツマグロヒョウモン**、**テングチョウ**、**ムラサキシジミ**、**ヤマトシジミ**を確認しました。（ガ類は写真参照）



クロシタアオイラガ幼虫

トンボ目 12種

**ウチウヤンマ**と**タイワンウチウヤンマ**の2種とも確認しました。**キイトンボ**は先月より増えました。その他、**ハグロトンボ**、**シオカラトンボ**、**オオシオカラトンボ**、**ギンヤンマ**、**オオヤマトンボ**、**リスアカネ**、**コシアキトンボ**、**チョウトンボ**、**ウスバキトンボ**を確認しました。



タイワンウチウヤンマ

カメムシ目

**ニイニゼミ**、**クマゼミ**、**アブラゼミ**の順で鳴き声が多く聞こえます。羽化殻は**クマゼミ**だけ見つけれませんでした。**アオハバコロモ**は羽化したての個体が多数、枝に止まっていた。外来種の**クスベニヒラタカスミカメ**は、ケヤキ広場の小さなクスノキだけで確認しました。



アブラゼミ羽化殻

コウチュウ目

クヌギの樹液には、**カナブン**と**シロテンハナムグリ**は来ているものの、「カブクワ」は見つけられませんでした。右の写真には**ルイスコオニゲシキスイ**もはっきり写っています。その他、**マメコガネ**、**オオナガコムツキ**、**ケオビアリモドキ**、**キマワリ**などを確認しました。



カナブンなど



「千石荘」昆虫調査速報（2019年8月）

2019年8月6日 天候：くもり 調査者1名

夏らしくなったのは、クマゼミ、アブラゼミ、ニイニイゼミの鳴き声のせいもあります。ツクツクボウシも少し鳴き始めました。右の写真のように、雑木林の中には、昨年の台風でギャップができた場所があります。



チョウ目 チョウ類9種

チョウ類は、ナミアゲハ、アオスジアゲハ、キタキチョウ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、サトキマダラヒカゲ、ツマグロヒョウモン、ツバメシジミ、ヤマトシジミを確認しました。ガ類は、フクラスズメの幼虫、シロオビノメイガ、ウラベニエダシヤクを確認しました。



ツバメシジミ

トンボ目 11種

ハグルトンボ、キイトンボ、ウチウヤンマ、タイウンウチウヤンマ、ギンヤンマ、シオカラトンボ、ショウジョウトンボ、リスアカネ、コシアキトンボ、チョウトンボ、ウスバキトンボを確認しました。個体数が特に多かったのは、シオカラトンボとウスバキトンボです。



キイトンボ

バッタ目

鳴き声を聞いたのはキリギリスとエンマコオロギで、前者は力強く鳴き、後者は鳴き始めの時期で弱々しく鳴いていました。その他、ウスイロササキリ、アオマツムシの幼虫、ハラヒシバッタ、ショウリョウバッタ、クルマバッタモドキ、コバナイナゴを確認しました。



アオマツムシ幼虫

ハエ目

眼にまとりわり付くコバエは種類が分かりません。ヒトスジシマカは暑さのせいかなめです。シオヤアブは暑さの中でも活動的です。その他、ウシアブ、ミスアブ、アメリカミスアブ、スキバツリアブ、コウヤツリアブ、ホソヒメヒラタアブなどを確認しました。



ミスアブ

「千石荘」昆虫調査速報（2019年9月）

2019年9月10日 天候：晴れ 調査者1名

台風15号後がもたらした残暑が厳しい一日でした。稲穂が実る水田上を吹く風には、涼しさのかけらもありません。そんな中、大井谷池のほとりて、ツバメが15羽ほど群れていました。ねぐらの出来始めかも。



チョウ目 チョウ類13種

チョウ類は、ナミアゲハ、ナガサキアゲハ、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ウラギンシジミ、ウラナミシジミ、ヤマトシジミ、タイミョウセセリ、イチモンジセセリ、チャパネセセリ、ガ類は、コシロシタバなどを確認しました。



ウラナミシジミ

トンボ目 8種

キイトンボ、ギンヤンマ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、リスアカネ、コシアキトンボ、チョウトンボ、ウスバキトンボを確認しました。シオカラトンボ以外は、それぞれ1個体のみ確認でした。大井谷池でトンボ類を見なかったのは、先に述べたツバメのせいかもしれません。



チョウトンボ

バッタ目

樹上のクサヒバリの鳴き声はそこそこ聞きました。カナタタキとアオマツムシは少々。地面から聞こえるエンマコオロギ、オカメコオロギ類、ツツシサセコオロギ、マダラスなどの鳴き声も少しだけです。ツチイナゴはまだ幼虫で、イボバッタやコバナイナゴは成虫になっていました。



オナガササキリ

カメムシ目

セミ類は、先月のクマゼミから、ツクツクボウシへ主役交代です。アブラゼミ、ニイニイゼミ、ミンミンゼミの鳴き声は少しでした。その他、ツマグロオオヨコバイ、オオヨコバイ、マエジロオオヨコバイ、アオバハゴロモ、イトカメムシ、オオメカメムシなど、普通種ばかりでした。



ツマグロオオヨコバイ

「千石荘」昆虫調査速報（2019年10月）

2019年10月8日 天候：くもり（雨後） 調査者1名

セミの鳴き声はまったく聞こえなくなり、一部の水田はイネ刈りを終えていました。でも、雨後の曇天の下では、秋を感じさせるものがあります。右の写真は、池の堤に生えていたツリガネニンジンです。



チョウ目 チョウ類8種

チョウ類は、ナミアゲハ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、クロコノマチョウ、ヤマトシジミ、ウラナミシジミ（多い）、チャパネセセリ、イチモンジセセリ、ガ類は、チャミノガ幼虫、シロオビノメイガ、コブノメイガ、シロアヤヒメノメイガなどを確認しました。



シロアヤヒメノメイガ

バッタ目

樹上からは、クサヒバリ、アオマツムシ、カナタタキ、草上からは、オナガササキリ、カンタンなど、地面からは、マツムシ、エンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、マダラスの鳴き声が聞こえました。バッタ類は、コバナイナゴ、ツチイナゴ、オンパバッタ類2種を確認しました。



ウスイロササキリ

カメムシ目

ヨコバイ亜目では、ツマグロオオヨコバイ、アオバハゴロモ、エノキワタアブラムシなど、カメムシ亜目では、ヨコツナサシガメ幼虫、アカスジカスミカメ、ナシグンバイ、クサギカメムシ、ホシハラヒロヘリカメムシなど、よく見かける種ばかりの確認となりました。



クサギカメムシ

その他

トンボ目は、アオイトトンボ、オオアオイトトンボ、アオモンイトトンボの3種だけで、アカネの仲間は確認できずでした。カマキリ目はハラヒロカマキリの卵囊2個だけで、そのうちの1個には卵囊寄生するカマキリタマゴカツオブシムシが産卵していました（右の写真）。



ハラヒロカマキリ卵囊

「千石荘」昆虫調査速報（2019年11月）

2019年11月5日 天候：晴れ 調査者1名

稲刈りが済んだ水田に吹く風がやや肌寒く感じられます。モズの高鳴きは、ピークを過ぎたかもしれません。池の堤が草刈りされすぎて、今年は花を見ないで終わるかと思っていたタヌキマメが、数株の花を咲かせていました。



キタテハ

チョウ目 チョウ類8種

チョウ類は、キタキチョウ、モンキチョウ、モンシロチョウ、キタテハ、ツマグロヒョウモン、ヤマトシジミ、ウラナミシジミ、チャパネセセリを確認しました。個体数がダントツで多かったのはウラナミシジミです。ガ類で種名が分かったのは、シロオビノメイガだけでした。



トンボ目 2種

アキアカネを、5♂3♀確認しました。1調査日でこれほど見た記憶はありません。徐々に回復しているのかもしれませんが、ほか、オオアオイトトンボ1♀を確認。



アキアカネ♂



アキアカネ♀

バッタ目

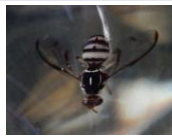
先月まで確認していなかったショウリョウバッタモドキを20個体以上確認し、なぜだか臍に落ちません。ウマオイの仲間は、メスでは区別ができません。ウマオイ属としました。17種全部は書けないので、カンタン、キンバハリ、ハラヒシバッタをあけておきます。



ショウリョウバッタモドキ

ハエ目

ロータリーから入ってすぐに、ペットボトルの仕掛けがあり、ミスジミハエだけ10個体以上、捕獲されていました。誰が何のために？。その他、ルリミスアブ、アメリカミスアブ、ホソヒラタアブ、クロヒラタアブ属、ホソヒメヒラタアブなどを確認しました。



ミスジミハエ

「千石荘」昆虫調査速報（2020年4月）

2020年4月9日 天候：晴れ 調査者1名

クサイチゴの白い花が一番目立ち、次はカラスノエンドウです。クサノオウ、ホトケノザ、ハコベ、ムラサキケマンなども花を咲かせていました。右の写真は、ツクシとコスミです。今年はコスミが少なめでした。



チョウ目 チョウ類7種

チョウ類は、モンシロチョウ、キタキチョウ、キタテハ、ツマグロヒョウモン、テングチョウ、ベニシジミ、ルリシジミの7種を確認しました。一番多かったのは、モンシロチョウで、次にテングチョウ、残りの5種は各1個体の確認でした。



ツマグロヒョウモン

バッタ目など

クビキリギスとキンヒバリは鳴き声のみの確認、ヤブキリ幼虫とキリギリス幼虫は目視による確認です。私事ながら、治らない耳鳴りは、クビキリギスの鳴き声に似ていて、遠近を利用して音の大きさが変わるのを確かめないと、クビキリギスの鳴き声かどうか確かめることが出来ません。



ヤブキリ幼虫

カメムシ目

ケヤキ広場の水たまりには、昨年と同じく、コセアカアメンボが多数浮いていて、交尾ペアもいました。ケヤキ広場のケヤキにも、いつものように、ヨコツナサシガメ幼虫がいました。芽吹き始めたコナラには、コブヒガカスミカメが群がるようにしていました。



コセアカアメンボ

その他

右の写真は水路近くにはいたナミコガタシマトビケラです。注目種では、カブトムシ幼虫とシロスジヒゲナガハナバチを確認しました。クサイチゴの花には、シマハナアブ、アシブトハナアブ、オオハナアブ、ヒロードツリアブ、クマバチなどが吸蜜に訪れていました。



ナミコガタシマトビケラ

「千石荘」昆虫調査速報（2020年5月）

2020年5月6日 天候：晴れ 調査者2名

水を入れる前の水田にはケリがいて、警戒の鳴き声を発しながら飛んでいました。林の中からツツドリも鳴き声が聞こえます。相変わらずコロナ禍が続く中、山口隼平さんに調査を手伝ってもらいました。



チョウ目 チョウ類8種

チョウ類は、ナミアゲハ、キアゲハ、ヒメウラナミジャノメ、クロコノマチョウ、サトキマダラヒカゲ、コミスジ、テングチョウ、ツバメシジミの8種を確認しました。ガ類の成虫ではホソオビヒゲナガやシマケンモン、幼虫ではミツボシキリガやヒロハモクメキリガなどを確認しました。



ミツボシキリガ幼虫

バッタ目など

バッタ目では、カヤヒバリとキンヒバリが鳴き声のみの確認、ヤブキリ幼虫は目視によって確認しました。カマキリ目では、オオカマキリ幼虫1個体、サツマヒメカマキリ終齢幼虫2個体を確認しました。サツマヒメカマキリが増加傾向にあるのは間違いのないでしょう。



サツマヒメカマキリ幼虫

コウチュウ目

クロヒラタハナムグリ、キイロテントウ、トビイロマルハナノミ、ヒゲナガハナノミ、ヒメフタホシテントウ、ヤツメカミキリ（右の写真）、アトボンハムシなどの他、クヌギの樹液でヨツボシケシキスイ、だんじりの駒の下でカブトムシ幼虫を確認しました。



ヤツメカミキリ

その他

植栽されたばかりのソメイヨシノに、ヒモワタカイガラムが付いていました。当館に標本がなかった種です。これで成虫です。その他、シオカラトンボ、クヌギカスミカメ、ケバカベリナガカスミカメ、キアシキンシギアブ、カタアカチュウレンジ、オオスズメバチなどを確認しました。



ヒモワタカイガラムシ

「千石荘」昆虫調査速報（2020年6月）

2020年6月9日 天候：晴れ 調査者1名

梅雨前の最後の晴天でしょう。水田に水が入れられ、堤や水田の土手のあちこちに火入れがされていました。藤村雅志さんに会い、サラサヤンマが止まっている場所を教えてください、エソトンボの羽化殻もいただきました。



チョウ目 チョウ類8種

チョウ類は、ナミアゲハ、モンシロチョウ、モンキチョウ、ヒカゲチョウ、キタテハ、テングチョウ、ツバメシジミ、ベニシジミを確認しました。右の写真は、以前にも紹介したギンツバメです。その他、ガ類では、キスジホソマダラ、チャミノガ幼虫、マイマイガ幼虫を確認しました。



ギンツバメ

トンボ目 6種

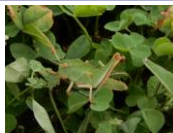
右の写真は藤村さんに案内してもらって撮影したサラサヤンマです。生息場所である湿地の減少のため、大阪府レッドリストで準絶滅危惧に指定されています。その他、キイトンボ、シオヤトンボ、シオカラトンボ、ショウジョウトンボ、コシアキトンボを確認しました。



サラサヤンマ

バッタ目

顔ぶれは、4月と5月からほとんど変わりません。キンヒバリとカヤヒバリは鳴き声で確認でき、ツチイナゴ、ヤブキリ幼虫、キリギリス幼虫は目視で確認しました。写真のトノサマバッタ幼虫だけ、今年初の確認となりました。もう終齢でした。



トノサマバッタ幼虫

コウチュウ目

5月から貝塚市内の各所でサツマイモや團芸アサガオの害虫であるヨツモンカメノコハムシが見つかり出しました。これまで大阪府では南港だけで確認されていたものです。千石荘では、6月2日にヒルガオ上で初めて確認し、この日も9個体確認しました。



ヨツモンカメノコハムシ

「千石荘」昆虫調査速報（2020年7月）

2020年7月2日 天候：晴れ 調査者1名

ニイニゼミが鳴いていました。田植えが終わわり、水田の上をツバメが飛び交っています。子育てをする鳥たちにとって、虫は大切な資源です。その虫たちの多くは植物を食べるので、植物にとっても大変な時期です。



チョウ目 チョウ類10種

チョウ類は、ナミアゲハ、アオスジアゲハ、キタキチョウ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、ヒカゲチョウ、アサマイチモンジ、ツマグロヒョウモン、ヤマトシジミ、ベニシジミを確認しました。右の写真は、自然遊学館に標本がなかったムナブトヒメスカシバです。



ムナブトヒメスカシバ

トンボ目 7種

ウチワヤンマのオスを4個体確認しました。それより個体数が多かったのがウスバキトンボで、10個体ほどが群飛していました。キイトンボも10個体以上確認しました。その他の確認種は、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、ショウジョウトンボ、コシアキトンボです。



キイトンボ

バッタ目

今年もナツツツツレサセコオロギの鳴き声を聞きました。キリギリス、ヤブキリ、キンヒバリ、マダラスズ、シバズも鳴き声による確認です。目視で確認したのは、クサキリ幼虫、ツチイナゴ、ショウリョウバッタ幼虫でした。アカハネオンバッタは終齢幼虫でした。



クサキリ幼虫

コウチュウ目

今月の写真もヨツモンカメノコハムシです。河添純子さんに行った調査で、すでに堺市から岬町まで泉州地方全般に生息していることが分かりました。千石荘のヒルガオ群落は先月よりも成長したのに、ハムシの方は個体数が減って、食痕の密度は大幅に減少しました。



ヨツモンカメノコハムシ



「千石荘」昆虫調査速報（2020年8月）

2020年8月4日 天候：晴れ 調査者1名

いったん収まったかに見えた新型コロナウイルスは、第2波を迎えています。自然からの復讐とも言えるかもしれませんが、千石荘病院跡地の整地がかなり進んできました。今こそ、自然に謝るチャンスなのかもしれません。



チョウ目 チョウ類14種

チョウ類は、ナミアゲハ、クロアゲハ、ナガサキアゲハ、アオスジアゲハ、キタキチョウ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ツマグロヒョウモン、テングチョウ、ヤマトシジミ、ツバメシジミを確認しました。



サトキマダラヒカゲ

トンボ目 8種

キイトンボ、ウチウヤンマ、ギンヤンマ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、ショウジョウトンボ、コシアキトンボ、ウスバキトンボを確認しました。この中では、キイトンボとウスバキトンボの個体数が多く、次にウチウヤンマの3個体、ほかは2個体以下でした。



ウチウヤンマ

バッタ目・カマキリ目

キリギリスが多く鳴いていました。アカハネオンブバッタやマダラバッタなど、それ以外の種は個体数が少なく、ショウリョウバッタも幼虫を1個体見ただけでした。オオカマキリ幼虫、ハラビロカマキリ幼虫、サツマヒメカマキリとも、各1個体の確認でした。



サツマヒメカマキリ

カメムシ目

先月まではニイニゼミだけだったのが、今回は、クマゼミ、アブラゼミ、ニイニゼミ、ツクツクボウシの鳴き声を聞きました。その他、アオバハゴロモ、アワダチソウガンバイ、マルカメムシ、イトカメムシ、ホシハラビロハリカメムシなどの普通種を確認しました。



クマゼミ

「千石荘」昆虫調査速報（2020年9月）

2020年9月8日 天候：晴れ 調査者1名

水田に実った稲穂の景観を台無しにするのが、ナラ枯れです。雑木林の所々が茶色というのは異様な光景です（右の写真）。台風10号が九州付近を通過した後なので、何か目新しいものを期待したのですが、冴えない結果でした。



チョウ目 チョウ類12種

チョウ類は、ナミアゲハ、クロアゲハ、アオスジアゲハ、キタキチョウ、ヒメウラナミジャノメ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ムラサキシジミ、ツバメシジミ、イチモンジセリ、チャバネセリ、キマダラセリを確認しました。アオスジアゲハは、交尾ペアでした（右の写真）。



アオスジアゲハ

トンボ目 5種

ハグロトンボ、ウチウヤンマ、ギンヤンマ、シオカラトンボ、ウスバキトンボを確認しました。ハグロトンボは林の中で1個体、ウチウヤンマは大井谷池で1個体、ギンヤンマは牛神池で3個体、残りのシオカラトンボとウスバキトンボは、広く分布していました。



ハグロトンボ

バッタ目

エンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、モリオカメコオロギ、ツツサセコオロギ、マダラスなどのコオロギ類や、ウスイロササキリ、オナガササキリの鳴き声が聞こえ始めました。バッタ類も、トノサマバッタ、ショウリョウバッタ、イボバッタなどを確認しました。



イボバッタ

カメムシ目

セミ類で一番鳴いていたのはツクツクボウシで、その他、ニイニゼミとアブラゼミの鳴き声も聞きました。ガガイモの咲きかけの花に、ヒメシュウジンガカメムシの幼虫と成虫がたかっけていて、茎にはキョウチクトウアブラムシがびっしり付いていました。



ツクツクボウシ

「千石荘」昆虫調査速報（2020年10月）

2020年10月1日 天候：晴れ 調査者1名

千石荘病院跡地の整地が進み、情けない景観です。ナラ枯れは相変わらずです。幹にはキクイムシ類の脱出孔があります。一部の水田で稲刈りが始まりましたが、ウンカ類による坪枯れがひどい状況でした。



チョウ目 チョウ類7種

チョウ類は、ナミアゲハ、ナガサキアゲハ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、クロコノマチョウ、ウラナミシジミ、チャバネセリを確認しました。ガ類は、シロオビノメイガとコブノメイガが多く、フクラスズメは幼虫で、中には若齢のものもいました。



クロコノマチョウ

バッタ目

樹上からは、アオマツムシ、クサヒバリ、カネタタキ、草上からは、オナガササキリ、カンタン、地面からは、エンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、モリオカメコオロギ、シバズ、マダラスの鳴き声が聞こえます。バッタ類では、ツチイナゴとコバネイナゴが目立ちました。



ササキリ

カメムシ目

セミ類では、ツクツクボウシだけが鳴いていました。ヤノクチナガオアブラムシの確認は今年初めてです。蟻道の中にいました。個体数が多かったのは、ツマグロオオコバイとオオモンシロナガカメムシで、その他、シロオビアワフキ、オオホシカメムシなどを確認しました。



ヤノクチナガオアブラムシ

その他

カマキリ目は、オオカマキリ（1♂1♀）とチョウセンカマキリ（2♂）、トンボ目は、ウチウヤンマ、ギンヤンマ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、リスアカネの5種、その他、ヒゲジロハサミムシ、カプトムシ幼虫、オオスズメバチなどを確認しました。



オオスズメバチ

「千石荘」昆虫調査速報（2020年11月）

2020年11月4日 天候：晴れ 調査者1名

稲刈りは終わりました。ナラ枯れは相変わらずです。10月9日に、甲虫分類学の博士である澤田義弘さんがカシノナガキクイムシの成虫を確認してくれました。右の写真はタヌキマメで、今年はこの1株しか見ていません。



チョウ目 チョウ類7種

チョウ類は、モンシロチョウ、カタテハ、ツマグロヒョウモン、ムラサキシジミ、ウラナミシジミ、ベニシジミ、イチモンジセリを確認しました。この中では、ウラナミシジミの個体数が断トツでした。ガ類では、クサシロキョトウとウンモンクチバ属の一種を確認しました。



ウラナミシジミ

トンボ目 3種

昨年の11月、アキアカネを8個体見て、一回の調査でそれだけ見た記憶がないと報告しましたが、今年は9個体を確認しました。千石荘周辺の環境悪化によって、この増加傾向が止められるのが心配です。その他、ネキトンボとリスアカネを確認しました。



アキアカネ (♂)

バッタ目

個体数が多いのは、ツチイナゴ、コバネイナゴ、クサヒバリ、オナガササキリ、アカハネオンブバッタです。カネタタキ、エンマコオロギ、モリオカメコオロギの鳴き声に力がありません。その他、ウスイロササキリ、ショウリョウバッタも多量に、マダラス、シバズを確認しました。



オナガササキリ (♀)

カメムシ目

セミはまったく鳴いていません。先月に引き続き、写真はヤノクチナガオアブラムシです。トビイロケアリの蟻道にいたものです。水田の周囲で、セジロウカ、ヒメトビウカ、アカスジカスミカメ、ウスモンミドリカスミカメ、といったお馴染みの種を確認しました。



ヤノクチナガオアブラムシ

「千石荘」昆虫調査速報（2021年4月）

2021年4月6日 天候：くもり 調査者1名

樹木では、ヤマザクラのほか、写真のネズの花が咲いていました。草のように見えるクサイチゴも、区分では木本になります。チョウ類は、**モンシロチョウ**と**ベニシジミ**の2種だけを確認しました。



カメムシ目

1個体いた**クロヒラタヨコバイ**の幼虫は、あまり見かけないものです。**ベニキジラミ**が作る虫こぶ、**ツマグロオオコバ**イ、**マルカメムシ**、**マメアブラムシ**なども個体数は少なく、**ヤノクチナガオオアブラムシ**だけを多数見るといふ不思議な結果でした。



ヤノクチナガオオアブラムシ

コウチュウ目

画像は、スイバの葉にいた**コガタリハムシ**で、メスの腹はパンパンに膨らんでいました。周りには幼虫もいました。タラノキには**ドウガネツヤハムシ**がいて、植物の種が分ると、植食者の昆虫の同定の確かさが増します。**カシノナガクイムシ**の食痕からは樹液が出ていました。



コガタリハムシ

ハエ目

一番個体数が多かったグループです。**オオクロバエ**や**アシトハナアブ**は、この時期に目立ちます。その他、**ナミホシヒラタアブ**、**ホソヒラタアブ**、**セズハリバエ**、**オオコスリカ**、**Actina**属の**ミスアブ**、**ヨモギワタマバエ**が作る虫こぶなどを確認しました。



セズハリバエ

ハチ目

春先に出る**シロスジヒゲナガハナバチ**は、今年は1個体だけ確認できました。この種と**ハグロハナバチ**のほかは、**ハリフトシリアゲアリ**、**ウメマツオアリ**、**トビイロケアリ**（**ヤノクチナガオオアブラムシ**と共生）のアリが3種だけで、肌寒かった分、虫たちの活動もイマイチでした。



シロスジヒゲナガハナバチ

「千石荘」昆虫調査速報（2021年5月）

2021年5月6日 天候：晴れ 調査者1名

牛神池の堤の下に湿地があり、ボランティアの方々が手入れをしてくれました。湿地の周りにはあるサクラの古木にシハイタケが生え、2015年以来、久々に**キノコヒモミノガ**の幼虫を確認しました。



チョウ目 12種

右の写真は、**アケビコノハ**の幼虫です。チョウ類は、**ナガサキアゲハ**、**アオスジアゲハ**、**モンシロチョウ**、**キタキチョウ**、**ヒメウラナミジャノメ**、**サトキマダラヒカゲ**、**コムスジ**、**キタテハ**、**ツマグロヒョウモン**、**ヤマトシジミ**、**ベニシジミ**、**コチャパネセリ**を確認しました。



アケビコノハ幼虫

コウチュウ目

シハイタケ上で、**ヒメオビオオキノコ**が摂食と交尾をしていました。**ナガニジゴミムシダマシ**は、タマキクラゲを摂食していました。いずれも菌食者です。その他、**ヤツメカミキリ**、**キマダラカミキリ**、**クロボシツツハムシ**、**コナラシギソウムシ**などを確認しました。



ヒメオビオオキノコ

ハチ目・ハエ目

右の写真は、アシナガバチの仲間に見えますが、**ハチガタハチ**という刺さないハチです。アリ類は4種だけで、活動の最盛期は、まだ先のようです。**キアシキンシギアブ**は、新緑の時期に、どうして目立つ体色をしているのかわかりません。



ハチガタハチ

その他

カメムシ目では、**シロヘリカメムシ**と**ヤノクチナガオオアブラムシ**のほかは、きわめて普通という種ばかりでした。トンボ目は、**ギンヤンマ**、**クロスジギンヤンマ**、**シオカラトンボ**の3種、バッタ目は、**ヤブキリ**の幼虫と**ツチヤナゴ**の2種を確認しただけでした。



シロヘリカメムシ

「千石荘」昆虫調査速報（2021年6月）

2021年6月3日 天候：晴れ 調査者1名

今年は5月中旬から梅雨入っています。水田に水が張られて、池の堤では草刈りと焼き入れが行われていました。アマガエルが多く鳴いていました。ツバメは、水面すれすれに飛んで、餌を探っていました。



チョウ目 12種

チョウ類は、**クロアゲハ**、**モンキチョウ**、**ヒカゲチョウ**、**クロヒカゲ**、**アサマイチモンジ**、**ルリシジミ**、**ベニシジミ**、**イチモンジセセリ**など12種を確認しました。ガ類は、**コウジヒメハマキ**、**マエキヒメジャク**、**ヨモギネムシガ**、**マダラマルハヒロソコガ**幼虫などを確認しました。



コウジヒメハマキ

トンボ目 5種

調査前に出会った秋武仁志さんから**サラサヤンマ**のいる場所を教えてくださいました。林縁では、**コシアキトンボ**が多く飛んでいます。なかなか止まりません。**シオカラトンボ**を開けた池で、**クロスジギンヤンマ**と**キイトンボ**を林に囲まれた池で確認しました。



キイトンボ

コウチュウ目

**カマキリタマゴカツオブシムシ**がアカメガシワの葉上の蜜腺から吸蜜しているようでした。ヒルガオ科を食害する**ヨツモンカメムシ**は、越冬世代のピークが過ぎて、ヒルガオ上で1個体を見ただけでした。その他、**ヨツボシオオキスイ**など、樹液周りの常連を多く確認しました。



カマキリタマゴカツオブシムシ

バッタ目など

鳴き声を聞いたのは、**タンボココロギ**、**キンヒバリ**、**カヤヒバリ**です。その他、バッタ目では、**ホシササキリ**、**キリギリス**、**ヤブキリ**の3種の幼虫など、カマキリ目では、**オオカマキリ**と**ハラヒロカマキリ**の2種の幼虫、ハサミムシ目では、**ヒゲジロハサミムシ**を確認しました。



オオカマキリ幼虫

「千石荘」昆虫調査速報（2021年7月）

2021年7月6日 天候：くもり/晴れ 調査者1名

セミの鳴き声は、ほとんどが**ニイニゼミ**で、その他、**クマゼミ**と**アブラゼミ**の調子のない鳴き声を1個体ずつ聞きました。林と農耕地の境を流れる用水路の貝塚市側に、外周路が貫通していました。



チョウ目 12種

チョウ類は、**アオスジアゲハ**、**キタキチョウ**、**モンシロチョウ**、**ヒメウラナミジャノメ**、**ヒカゲチョウ**、**アサマイチモンジ**、**コムスジ**、**ツマグロヒョウモン**、**ヤマトシジミ**、**ツバメシジミ**、**ベニシジミ**、**コチャパネセリ**を確認しました。ガ類は、**カノコガ**などの常連を確認しました。



アサマイチモンジ

トンボ目 8種

池では、**キイトンボ**、**ギンヤンマ**、**ウチワヤンマ**、**タイウンウチワヤンマ**、**チョウトンボ**、**コシアキトンボ**を確認しました。**ウチワヤンマ**は、2016年から6年連続の確認となりました。**ハグロトンボ**と**シオカラトンボ**は、林縁で確認しました。



ウチワヤンマ

バッタ目

画像は、**ハラヒシバッタ**のメスです。しばらく幼虫とオスしか見なかったので、久々に種まで同定できました。**ナツノツツラセ**は1個体だけ鳴いていました。その他、鳴き声では、**キリギリス**、**キンヒバリ**、**シバズ**、**マダラス**、目視では、**クサキリ**幼虫などを確認しました。



ハラヒシバッタ

コウチュウ目

写真の**モンキゴミムシダマシ**は、カワウソタケにいたものです。最初、オオキノコムシの仲間と間違えてしまいました。樹液周りでは、**コクワガタ**、**ヒラタクワガタ**、**カナブン**、**シロテンハナムグリ**、**ヨツボシケシキスイ**、**ルイスコオコケシキスイ**などが集まっていました。



モンキゴミムシダマシ



「千石荘」昆虫調査速報（2021年8月）

2021年8月6日 天候：晴れ 調査者1名

千石荘病院跡地側は、工事の喧騒で全くやりきれないのですが、水田側はイネの葉で緑色となりました。ナラ枯れは相変わらず、カシノナガキクイムシが出す木くずが根元に大量に溜まったクヌギやコナラがあります。



チョウ目 16種

個体数が多かったのは、草地ではモンキチョウ、林内ではサトキマダラヒカゲです。林内を飛びナガサキアゲハは、とても大きく見えました。ウラギンシジミが蔓草にぶら下がってくる回る行動は、何か意味がありそうです。写真には、クヌギの樹液を吸っているカタテハを選びました。



カタテハ

トンボ目 8種

写真が先月と同じウチワヤンマなのは芸なしですが、多く見たのはシオカラトンボとオシオカラトンボで、次いで、ウスバキトンボでした。今シーズンの千石荘では、後者の春の飛来を見ませんでした。キイトンボが少ないのは、牛神池の水位の低下と関係があるのかもしれませんが。



ウチワヤンマ

カメムシ目

セミ類では、ニイニゼミ、アブラゼミ、クマゼミ、ツクツクボウシの鳴き声を聞きました。カガイモの茎に並んで付いている黄色いアブラムシはキョウチクトウアブラムシです。ヤノクチナガオアブラムシは、樹幹に作られた蟻道の中に、幼虫と成虫が多数いました。



ニイニゼミ

コウチュウ目

写真のタマムシは、飛んでいた個体を叩き落して撮影したものです。カブトムシ、カナブン、スジアオゴミムシ、ヨツボシオオキスイは、誰かが仕掛けた蜜のトラップに落ちてもがいていました。速報に書いておくべき種としては、ミヤマカミキリがあげられます。



タマムシ

「千石荘」昆虫調査速報（2021年9月）

2021年9月13日 天候：くもり 調査者1名

水田では、イネの穂が実り始めました。その上空をツバメが行き交います。大井谷池は満水で、水辺の枯れ枝などが水没してトンボの止まる場所がなく、水位が下がった牛神池では、キイトンボが少しだけ見られました。



チョウ目 15種

チョウ類は、ナミアゲハ、キアゲハ、モンキチョウ、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ウラナミシジミ、キマダラセセリなどを確認しました。画像のハグルマトモエは、ヤガ科の大型種で、餌植物はネムノキです。ウンモンクチハの一種は、種までは分かりません。



ハグルマトモエ

バッタ目

秋の鳴く虫のシーズンに入り、エンマコオロギやツツレサセコオロギなど、鳴き声で確認できるコオロギの仲間が増えました。クサヒバリは、樹上から林縁の低木の葉に降りてきていて、シャッターチャンスが何度もありました。ショウリョウバッタモドキは健在です。



クサヒバリ

カメムシ目

セミ類では、ニイニゼミ、アブラゼミ、ツクツクボウシの鳴き声を聞きました。カガイモの花に、ヒメジュウジナガカメムシの幼虫が集まっていた。最近、この集団をよく見るようになりました。その他、アミガサハゴロモ近似種やクモヘリカメムシなどを確認しました。



ツマグロスケバ

その他

トンボ目では、シオカラトンボ、オシオカラトンボ、リスアカネ、ウスバキトンボ、カマキリ目では、オオカマキリ（3♂）とチョウセンカマキリ（1♂）を確認しました。右の画像は、シママメヒラタアブという小型のハナアブです。



シママメヒラタアブ

「千石荘」昆虫調査速報（2021年10月）

2021年10月14日 天候：晴れ 調査者1名

ほとんどの水田で稲刈りが終わっていました。雑木林では相変わらずナラ枯れが目立ちます。外周路が重機で拡大されていますが、さすがに舗装などというバカげたことは計画されていないでしょう。



チョウ目 10種

チョウ類は、キタキチョウ、モンキチョウ、モンシロチョウ、ヒカゲチョウ、コムシジ、ルリタテハ、カタテハ、ツマグロヒョウモン、ウラギンシジミ、ウラナミシジミを確認しました。画像のツマグロヒョウモンは、雌雄のペアをもう1頭のオスが邪魔しているところです。



ツマグロヒョウモン

トンボ目 4種

マユタテアカネは、大阪府レッドリスト種ではありませんが、最近の千石荘の調査では、あまり確認されていません。自然遊学館では、2004年の寄贈標本が最後の当地標本です。その他、リスアカネ、ギンヤンマ、オシオカラトンボを確認しました。



マユタテアカネ

カメムシ目

セミ類の鳴き声は聞こえませんでした。アミガサハゴロモ近似種は各地で増えているそうです。稲刈り後の水田周辺の草地で、セジロウンカ、トビロウンカ属、アカスジカスミカメ、ウスモンミドリカスミカメ、ホソミドリカスミカメ属などを多数確認しました。



アミガサハゴロモ近似種

バッタ目

ササキリ類やコオロギ類などの鳴く虫ワールドとなりました。通りがかりの方に、「屋間でも鳴くんですね」と聞かれました。セスジツユムシは、普通種ながら減っているのかもしれませんが。オンプバッタ属は相変わらず、「アカハネ」の方だけが確認されました。

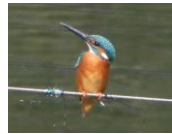


セスジツユムシ

「千石荘」昆虫調査速報（2021年11月）

2021年11月2日 天候：晴れ 調査者1名

稲刈りは完全に終わり、畑では冬野菜が栽培されています。ケヤキ広場のケヤキ2本が変な色付き方をしている、踏圧防止の柵が作られていました。昆虫以外では、ジムグリやカワセミ（右の写真）を撮ることができました。



チョウ目 9種

チョウ類は、クロアゲハ（幼虫も）、キタキチョウ、モンキチョウ、モンシロチョウ、クロコノマチョウ、カタテハ、ツマグロヒョウモン、ウラナミシジミ、チャバネセセリを確認しました。ウラナミシジミが圧倒的に多く、その次はクロコノマチョウでした。



クロアゲハ幼虫

トンボ目 2種

アキアカネは、一昨年の8個体や昨年の9個体より少なく、確実に確認できたのは1♂1♀だけでした。その他、数個体のアカネの仲間は飛翔中で、種の確認ができませんでした。あとは、牛神池でアオイトンボを1個体だけ確認しました。



アキアカネ（♀）

バッタ目など

樹上からは、クサヒバリの鳴き声が聞こえます。草上では、オナガササキリやウスイロササキリが鳴き、地面では、エンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、マダラスズが鳴いています。個体数が多いのは、コバネイナゴとツチイナゴで、カマキリ目は、ハラヒロカマキリが1個体だけでした。



ハラヒロカマキリ

カメムシ目

14種いましたが、アミガサハゴロモ近似種やミナミアオカメムシなど、これまでよく見てきた種ばかりでした。ヤノクチナガオアブラムシはトビロケアリの蟻道の中に多数いました。幼虫も混じっています。意外にも、シロオビアワフキは、今年初めての確認となりました。



ヤノクチナガオアブラムシ